

大阪市阿倍野区

阿倍野筋遺跡発掘調査報告

南斎場再建整備に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市阿倍野区

阿倍野筋遺跡発掘調査報告

南斎場再建整備に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会



調査区全景（西から）

大阪市阿倍野区

阿倍野筋遺跡発掘調査報告

南斎場再建整備に伴う発掘調査報告書

1999. 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

阿倍野区阿倍野筋4丁目から5丁目にかけてを範囲とする阿倍野筋遺跡は、1989年に新たに発見された古墳時代前期の集落遺跡である。しかし、発見以来、発掘調査を実施する機会が少なく、不明な点が多い遺跡であった。

本書は、この阿倍野筋遺跡について初めて上梓する報告書である。ここで報告する発掘調査は、古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物をはじめとする集落関係の遺構に加え、多くの漁具が見つかったことで、この遺跡の特徴を初めて明らかにするものであった。当時は海が近く、この条件を生かして漁がさかんに営まれていたのであろう。都市化が進み、潮の香りすらしない現在では想像もつかない光景であるが、発掘調査はわれわれに再び海を感じさせてくれる。

本書の公刊によって、この遺跡の重要性が広く認識され、本書が活用されることを願うとともに、忌憚ないご意見、ご批判をいただければ幸いである。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行まで、さまざまなご支援とご協力をいただいた大阪市環境事業局をはじめとする関係各位に、心からのお礼を申しあげる次第である。

1999年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐 治 敬 三

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市環境事業局の委託を受け、1998年5～9月に実施した阿倍野区阿倍野筋4丁目の南斎場再建整備に伴う発掘調査(AS98-2次)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書の費用は、大阪市環境事業局が負担した。
- 一、発掘調査および報告書作成は、財団法人大阪市文化財協会調査部長永島暉臣・同部調査課長代理田中清美(長原調査事務所長)の指揮のもと、同調査員寺井誠が行った。なお、巻末の英文要旨は同宮本康治とオーストラリア・クィーンズランド大学のRobert Condon氏、アメリカ合衆国・ワシントン州立大学のMatthew W. Van Pelt氏の助けを得て、寺井が執筆した。
- 一、基準点測量および写真測量は朝日航洋株式会社、遺構写真の一部と遺物写真の撮影は徳永罔治氏に委託した。また、鉄器のX線撮影は調査課調査員伊藤幸司が行った。
- 一、発掘調査で得られた図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡 例

1. 遺構名の表記は、竪穴住居・掘立柱建物(SB)、溝(SD)、土壌(SK)、柱穴・ピット(SP)、その他(SX)の分類記号に続けて、層位に対応する3桁の番号を付した。
2. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文、挿図中ではTP+〇mと記した。また、挿図中の方位は座標北で、座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値を用いた。
3. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原眞1968]、古式土師器：[米田敏幸1991]、古墳時代の須恵器(TK217型式まで)：[田辺昭三1966]、飛鳥、奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器[佐藤隆1992]、瓦器[森島康雄1992]

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第1節 遺跡の立地と地形環境	3
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	4
第3節 阿倍野筋遺跡での既往の調査	7
第Ⅲ章 調査の結果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 層序と出土遺物	10
1) 層序	10
2) 石器遺物	10
第3節 古墳時代の遺構と遺物	15
1) 竪穴住居	15
2) 掘立柱建物	20
3) 溝	21
4) 土壌	22
5) その他の遺構	23
6) 第3層出土遺物	24
第4節 中近世の遺構と遺物	27
1) 中世の遺構と遺物	27
2) 近世の遺構	28
第Ⅳ章 遺構と遺物の検討	29
第1節 阿倍野筋遺跡の変遷	29
1) 旧石器～弥生時代	29

2)古墳時代前期	29
3)古墳時代中期以降	31
第2節 管状土鍾からみた操業形態の復元	32
第3節 古墳時代前期の上町台地とその周辺	35
1)遺跡の事例	35
2)海岸部における集落出現の背景	37
第4節 まとめ	39
引用・参考文献	40

あとがき・索引

英文要旨

報告書抄録

原色図版目次

1 竪穴住居と出土遺物

上：SB301遺物出土状況(東から)

下：SB301出土遺物

図版目次

1 地層断面

上：Ⅰ区西壁地層断面

下：Ⅰ区南壁地層断面

2 竪穴住居(一)

上：SB301検出状況(西から)

下：SB301柱穴および床面遺物検出状況(西から)

3 竪穴住居(二)

上：SB301完掘状況

下：SB301と掘立柱建物

4 竪穴住居遺物出土状況(一)

上：壺(23)出土状況

中：甕(27)出土状況

下：小型丸底土器(29)出土状況

5 竪穴住居遺物出土状況(二)

上：鉢(37～40)出土状況

中：小型丸底土器(32)出土状況

下：壺(25)出土状況

6 掘立柱建物(一)

上：柱穴検出状況

中：SB302完掘状況

下：SB303完掘状況

7 掘立柱建物(二)

上：SB304完掘状況

中：SB305完掘状況

下：SB303柱穴断面

8 古墳時代の遺構(一)

上：SD305完掘状況

中：SK303断面

下：SK303完掘状況

9 古墳時代の遺構(二)

上：SK305検出状況

中：SK305完掘状況

下：SK304・305完掘状況

10 遺物出土状況

上：SX301

中：SX301(上の破片を取り上げた後)

下：鉄製刺突具(157)出土状況

11 近世の遺構

上：SX101畝間完掘状況

下：Ⅱ区完掘状況

12 石器遺物

上：有茎尖頭器および石鏃

下：ナイフ形石器、細部調整のある剥片、石匙、
結晶片岩

13 SB301出土遺物(一)

14 SB301出土遺物(二)

15 古墳時代前期の遺物

上：SK303

下：SX301・第3層

16 漁具・製塩土器

上：古墳時代前期の管状土錘

下：製塩土器、飯蛸壺、中世の管状土錘、鉄製刺
突具

17 古墳時代後期以降の遺物

SB301の1・2層、SD305、第3層、第2層

挿 図 目 次

図 1	調査区の位置	1	図16	掘立柱建物実測図	20
図 2	遺跡周辺の地形と難波砂堆の分布	3	図17	SD305と出土遺物	21
図 3	周辺の遺跡位置図	4	図18	SK302・303実測図	22
図 4	AS89－1次調査の遺構と遺物	7	図19	SK303出土遺物	22
図 5	過去の調査区と立会調査の位置	8	図20	SK304・305と出土遺物	23
図 6	I 区地区割	9	図21	SX301と出土遺物	24
図 7	層位断面図	11	図22	第3層出土遺物(土器・石器)	25
図 8	石器遺物	12	図23	第3層出土遺物(漁具・製塩土器)	26
図 9	石匙	13	図24	第3層出土遺物(鉄器)	26
図10	古墳時代の遺構配置図	14	図25	第2層下面検出遺構と出土遺物	27
図11	SB301実測図	15	図26	SX101畝間実測図	28
図12	SB301各遺構実測図	16	図27	II 区池実測図	28
図13	SB301出土遺物(1)	17	図28	阿倍野筋遺跡の古墳時代前期の遺構配置図	30
図14	SB301出土遺物(2)	18	図29	管状土錘の計測値の比較	33
図15	SB301出土遺物(3)	19	図30	上町台地と長柄砂洲上の遺跡分布図	36

表 目 次

表 1	AS98-2次出土土錘一覧	32
-----	---------------	----

写 真 目 次

写真 1	作業風景	9
------	------	---

第Ⅰ章 調査にいたる経緯

大阪市設南斎場は、1876年に民間の八弘社が火葬場に礼祭場を併設した「天王寺祭儀場」を、1907年に大阪市が買収して、市営葬儀場としたものである。1920年にはここに大式場を新設して、「阿倍野葬儀場」と改称したが、その後も「阿倍野斎場」、「南斎場」と改称され、現在に至る。なお、火葬場は1957年に、大式場は1985年に解体された。

斎場跡地に再建される南斎場は区民センター・図書館・公社住宅・地下駐車場などを合築した複合施設であり、阿倍野筋からも地下駐車場へ入れるように進入路が建設されることとなった。これらの建設予定地は埋蔵文化財包蔵地に当たるため、事前に2回にわたって試掘調査が実施された。1回目は1998年3月24日に大阪市教育委員会文化財保護課によって斎場建設予定地内で2箇所の試掘坑を掘削した。その結果、南端の試掘坑で現地表面から約80cm下に中世と思われる包含層を検出した。

同年4月10日には地下進入路建設予定地内で2回目の試掘調査が実施され、2箇所の試掘坑を掘削



図1 調査区の位置

第Ⅰ章 調査にいたる経緯

した。その結果、いずれの試掘坑でも現地表面から90～100cm下で古墳時代の包含層が良好に残っていることが確認された。

この結果を受けて、大阪市教育委員会は大阪市環境事業局に対し、工事の施行によって地下の包含層が破壊される部分を対象に発掘調査が必要であることを通知し、同時に財団法人大阪市文化財協会に対して発掘調査を依頼した。

大阪市環境事業局と大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会は調査の方法・期間などについて協議を重ね、阿倍野筋に面する進入路建設予定地661㎡、駐車場の南側の斎場建設予定地165㎡を対象に、平成10年度中に発掘調査および報告書作製を完了させることで合意した。なお、今回の報告では便宜上、地下進入路建設予定地に設定された調査区をⅠ区、斎場建設予定地の調査区をⅡ区と呼ぶことにする。

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地と地形環境

阿倍野筋遺跡は上町台地の尾根筋に立地する。遺跡の東側は河内平野に向かって緩やかに下っているが、西側は約500mのところで急斜面に当る。これは台地の西縁には上町断層が延びているのに加えて、縄文海進の最盛時に波食を受けたために、現在のような急崖地形が形成されたものと思われる。また、台地の西縁には難波砂堆が広がっている。これは縄文海進後の海退期に形成されたもので、大阪湾の沿岸流の影響によって台地の南側ほど砂堆の幅が狭くなる。阿倍野筋遺跡で集落が形成される古墳時代前期は「河内湖Ⅰの時代」と呼ばれている[梶山彦太郎・市原実1986]。遺跡の立地を理解する上で、当時の海岸線を把握することは非常に重要であり、ここではこれまでに実施された砂堆上の調査をもとに当時の海岸線を推定したい。

これまで砂堆上では工事中に遺物が採集されたことがあり、浪速区敷津遺跡や南区難波貝層遺跡、西成区玉出遺跡では地下6mのところで弥生土器や古墳時代後期の須恵器が出土している[荻田昭次・堀田啓一1967]。また、浪速区の浪速元町遺跡の調査(NK96-1次)では、上面がTP+0.8mの砂層から古墳時代後期の摩滅した土師器・須恵器が出土した[久保和士1998a]。これらの遺物は海成層に含まれており、二次堆積によるものと判断される。一方、台地の西縁から500mほど離れた中央区の平野町3丁目所在遺跡やそこから約50m南の大坂城下町遺跡のOJ98-8次調査地では弥生時代後期末から庄内式期にかけての土器がまとまって出土している。

以上から、弥生～古墳時代の海成層が確認されている敷津遺跡と玉出遺跡を結んだ線より東側に海岸線があったと推定される。また、台地の縁から500mほど離れた平野町3丁目所在遺跡ではこの時期には陸化していたが、阿倍野筋遺跡の西側は、大阪湾の沿岸流の影響で南側ほど砂洲が形成されにくい環境にあったようで、当遺跡から1km未満のところに海岸線があったと思われる。

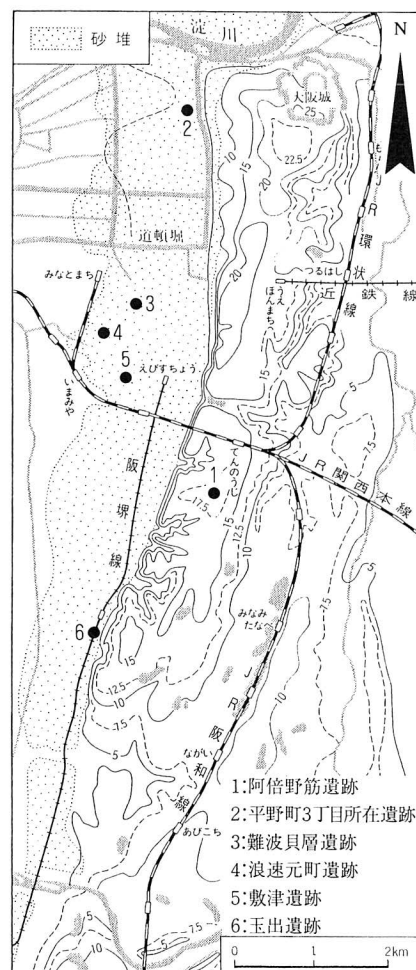


図2 遺跡周辺の地形と難波砂堆の分布
〔前田昇1988〕を一部改変

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

上町台地上でヒトの活動の痕跡が見られるようになるのは、後期旧石器時代になってからである。この時代になると遺跡の2 km東に位置する桑津遺跡や南5 kmの山之内遺跡では、サヌカイト製のナイフ形石器が出土している。また、中期旧石器時代に該当する時期では、山之内遺跡でナウマンゾウやオオツノシカなどの哺乳動物の足跡化石が調査されたり[大阪市文化財協会1998c]、阿倍野筋の地下鉄工事の際にはナウマンゾウの右腓骨の化石が発見されたりしてはいるものの[樽野博幸1979]、ヒトが生活した痕跡はいまだ確認されていない。

縄文時代になるといわゆる縄文海進によって海水面が上昇して、上町台地は半島化する。縄文海進のピーク時の縄文時代早期～前期については、生野区勝山遺跡、天王寺区宰相山遺跡、中央区森の宮



図3 周辺の遺跡位置図

(『大阪市文化財地図』(平成7年度版)を使用)

遺跡、住吉区山之内遺跡などで、この時期の土器片が見つまっている[松尾信裕1997]。特に宰相山遺跡では谷の最下層から縄文時代早期に属する高山寺式土器が出土しており、これは大阪市内で最古の土器である[松尾信裕・積山洋1996]。また、阿倍野筋遺跡の北東約3 kmの地点に位置する勝山遺跡でも、自然流路に伴って縄文時代早期から前期にかけての爪形文土器が出土している[松本百合子1991]。

縄文時代後期になると、海水面が次第に下がり、海岸線が後退しはじめる。この時期に貝塚が形成されるのが森の宮遺跡である。居住域はまだ確認されていないものの、3次調査では墓域が確認されており、弥生時代のものも含めて16体の人骨が出土している[難波宮址顕彰会1978]。また、1995年に実施された調査でも、縄文時代後晩期の土器に加え、漆塗りの結歯式竪櫛や大型石錘のような当時の生活・習俗を反映するような遺物が出土している[大阪市文化財協会1996]。一方、台地の西縁周辺では、西成区岸ノ里遺跡で縄文時代後期の市来式土器が[森浩一1958]、天王寺区天王寺公園遺跡で撥形石斧が採集されているが[前田豊邦1988]、いずれも詳細は不明である。

弥生時代になると海岸線がさらに後退して、河内湾は上町台地先端の長柄砂洲の発達によって潟化が始まる。河内潟周辺では畿内第Ⅰ様式以降、遺跡数が爆発的に増加する。河内潟に面した上町台地東斜面には、森の宮遺跡[平田洋司1996]や桑津遺跡[大阪市文化財協会1998a]といった拠点集落が展開するようになる。これらの集落は畿内第Ⅰ様式後半に現れ畿内第Ⅳ様式が終わる頃には衰退に向かうという共通した傾向がある。また、台地上ではこれらの集落以外でも住吉区山之内遺跡や南住吉遺跡でも集落が形成される。山之内遺跡は森の宮遺跡や桑津遺跡と同様に畿内第Ⅰ様式の段階に集落が現れ、畿内第Ⅳ様式の段階には衰退する[大阪市文化財協会1998c]。また、南住吉遺跡では畿内第Ⅲ様式の段階の竪穴住居が検出されているが、弥生時代の遺構が確認されているのは1地点のみである[大阪市文化財協会1998b]。

弥生時代後期から古墳時代前期は前後の時期に比べて遺跡の数が非常に少ないが、前代と連続性のない遺跡が現れる。上町台地北半およびその周辺では、崇禅寺遺跡や平野町3丁目所在遺跡といった低地の砂洲上に位置する遺跡が増加し、台地の南半では汀線近くの遺跡が減少する一方で、今回報告する阿部野筋遺跡や松原市の大和川今池遺跡のような台地上の遺跡が現れるのである。特に、前者の背景については、河内湖の入り口としての水上交通の要衝として発達したということが想定されている[積山洋1994]。しかし、いずれの地域でも須恵器が出現する頃にはこれらの遺跡は衰退する。

上町台地上には本来古墳が多数あったようである。生野区の御勝山古墳や住吉区の帝塚山古墳のような前方後円墳に加えて、発掘調査の遊離資料として埴輪や古墳の副葬品の一部が出土する。例えば、台地の西斜面に位置する中央区南本町の調査では、平安時代の地層から鋸歯文が施された滑石製容器の蓋が出土した[櫻井久之1994]。これは4世紀中ごろから5世紀初頭に位置づけられるもので、台地上に前期古墳があった可能性が高い。

阿倍野筋遺跡の周辺でも、古墳の存在を思わせる塚原などの小字名が残っているが、古墳の確証があるのは聖天山古墳と丸山古墳の2基だけである。これらの古墳は阿倍野筋遺跡の南側に延びる谷地形に沿って立地する。聖天山古墳は1951年に土砂採取の際に石室が見つかり、馬具や直刀を

はじめ須恵器が出土している。丸山古墳も1913年に発掘調査が実施されており、遺物が出土している。このほか、周辺には松虫塚、東金(釜)塚、西金(釜)塚というような古墳を連想させるような小字名があるが、経塚など別のものに由来する可能性もあり、確証はない[上田宏範1988]。

古墳時代中期以降になると前代と一転して、台地上で遺跡数が増加する。北5kmの中央区法円坂には5世紀後半代の大倉庫群が並び、桑津遺跡[大阪市文化財協会1998a]、山之内遺跡[大阪市文化財協会1998c]には奈良時代まで継続する集落が営まれる。また、本遺跡の南東2kmに位置する東住吉区の山坂遺跡で古墳時代後期の掘立柱建物が検出されている[積山洋1996]。

飛鳥時代には北約5kmには前期難波宮が造営されて、台地上の各所で寺院が建立されるようになる。本遺跡から北東約300mで、難波大道推定ラインから西約1kmには阿倍寺が創建される。ここにはかつて塔の心礎と基壇と思われる高まりが存在し、1976年の試掘立会の際には白鳳期の重孤文軒平瓦が採集されている[宮本佐知子・佐藤隆1996]。また、北約2kmの天王寺区細工谷遺跡では飛鳥時代後半から奈良時代にかけての多量の瓦に加え、「百済尼」、「百尼寺」などと書かれた墨書土器や、屋根材と考えられる部材が出土しており、未確認の古代寺院の存在を予見させるものである[大阪市文化財協会1999]。集落は桑津遺跡や山之内遺跡に加えて、南住吉遺跡や遠里小野遺跡でも見られるようになる。南住吉遺跡では住吉大社の南東800mに位置する地区の発掘調査で、溝や柵を伴う掘立柱建物群が15棟検出されており、「住吉津」に関連した有力氏族の屋敷地と想定されている[大阪市文化財協会1998b]。

平安時代以降については四天王寺や住吉大社の周辺で遺構・遺物が多く確認されている。四天王寺では西門前に中世の遺構・遺物が密に分布しており、四天王寺と関係の深い門前町があったと思われる[大阪市文化財協会1996]。住吉大社周辺でも境内地東側や北側で遺構が密に確認されている。遺物も平安時代の井戸に伴って出土したガラス製容器の蓋[平田洋司1998]や、境内地東側の調査では鎌倉時代の他地域産の瓦器や北宋銭74枚[久保和士1996]などが出土していることから、ここが水上交通を含めた交通の要衝であったものと思われる。

一方、本遺跡の周辺では平安時代以降についての考古学的な状況はあまり明らかになっていないが、平安時代中期以降には現在の阿倍野筋である熊野街道が整備され、当遺跡から約1km南には遙拝所のひとつである阿倍野王子(現阿倍王子神社)が設立されている。熊野参拝は鎌倉・室町時代にいたるまで盛んに行われたようであるが、交通の要衝であったために南北朝から戦国時代にかけてしばしば戦場となり、阿倍野周辺は荒廃してしまったようである[直木孝次郎・森杉夫監修1986]。江戸時代になると交通の中心は熊野街道の西側を通る紀州街道に移り、市街地の拡張が四天王寺付近で止まることから、長らく市街地化せず、農村のままで近現代を迎えるのである。

第3節 阿倍野筋遺跡での既往の調査

大阪市文化財協会は今回の調査を含めて過去に5回の発掘調査を実施している。

1989年11月に大阪市教育委員会が大規模開発に伴う試掘を行った際、当地が遺跡であることが初めて確認され、大阪市文化財協会が発掘調査(AS89-1次)を実施した。この調査では古墳時代前期の竪穴住居が3棟確認され、そのうち完掘された2棟にはいずれもベッド状遺構が伴っていた[佐藤隆・前田勝巳1990・1991]。遺物には竪穴住居SB01から出土した甕の口縁部(図4-1)や小型丸底土器(2)、小型器台(3)、凝灰岩製の砥石(4)や土壌SK01から出土した低脚高杯(5・6)などがあり、これらの土器は布留式期Ⅰに属するものである。なお、この発掘調査をきっかけに阿倍野筋遺跡は大阪市の埋蔵文化財包蔵地に指定されることとなった。

また、1997年3月には丸山通1丁目でAS96-7次調査が実施された[辻美紀1998a]。敷地内に2個所のトレンチが設定され、阿倍野筋に近い側のトレンチ(Ⅰ区)では中世前期の溝や土壌を検出した。阿倍野筋は周知の通り平安時代中期以降、熊野街道として盛んに利用されており、街道を中心にした土地利用がなされていたことを示すものかもしれない。なお、この調査では古墳時代前期の遺構・遺物はまったく出土していないことから、この時期の集落域からはずれるようである。

1998年2月に実施されたAS97-8次調査では、地山上面で庄内式期Ⅱ～Ⅲに属する竪穴住居が3

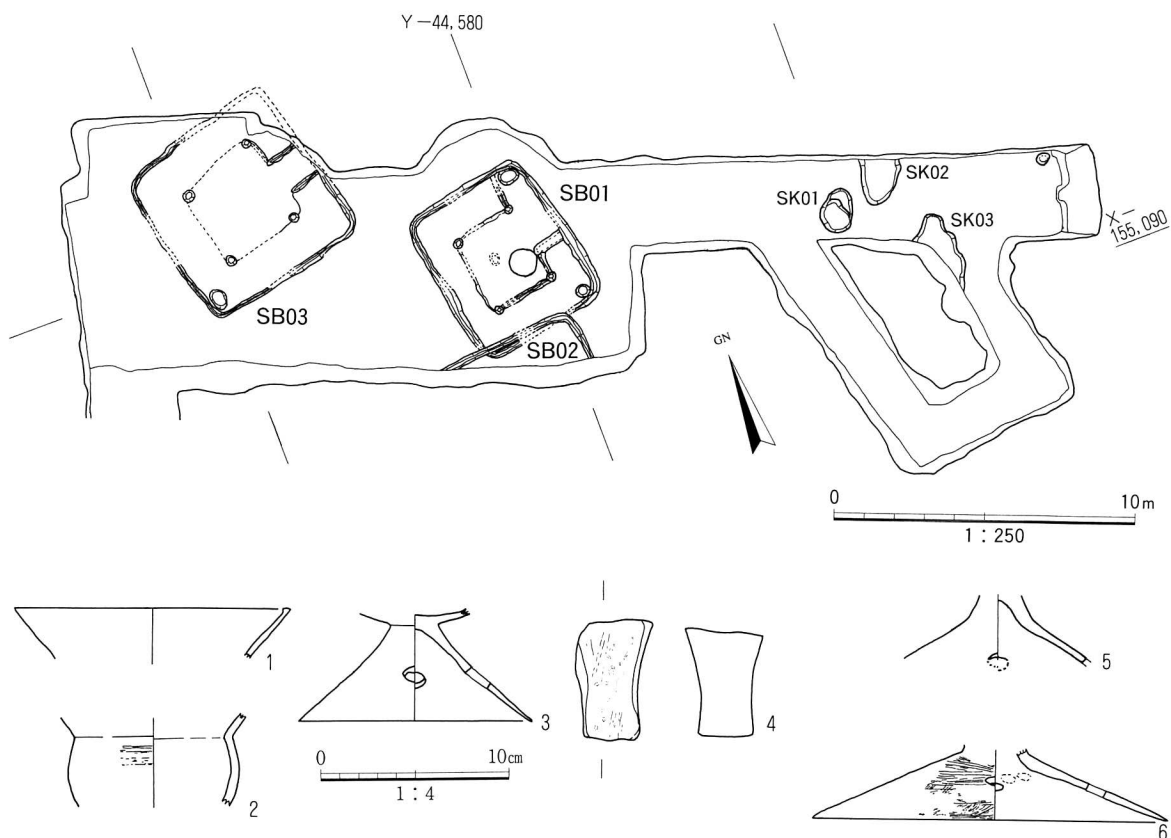


図4 AS89-1次調査の遺構と遺物

棟検出された[辻美紀1998b・1999]。その中でSB501は一辺9.0mに復元できる方形の大型の竪穴住居で、内面に水銀朱と思われる顔料が付着した鉢が屋内土壇から出土した(註1)。

1998年11月にはAS89-1次調査地の南隣で調査(AS98-7次)が行われた。その結果、桁行4間(7.2m)以上、梁行2間(5.5m)の総柱の掘立柱建物が検出され、柱穴のひとつから庄内式期Ⅱに属する鉢の底部が出土した[杉本厚典1999a]。

また、これまでの発掘調査は阿倍野筋の西側のみであるが、大阪市文化財協会によって行われてきた立会調査では、阿倍野筋の東側でも遺構や古い包含層が確認されている(図5)。特にAS97-5次の立会調査では、地山上面に径25cm、深さ70cmの柱穴が確認されており、阿倍野筋の東側にも古墳時代前期の集落が広がっていることを裏付けている。

註)

(1)この赤色顔料については科学的な分析を経っていないので、可能性が高いということに留める。

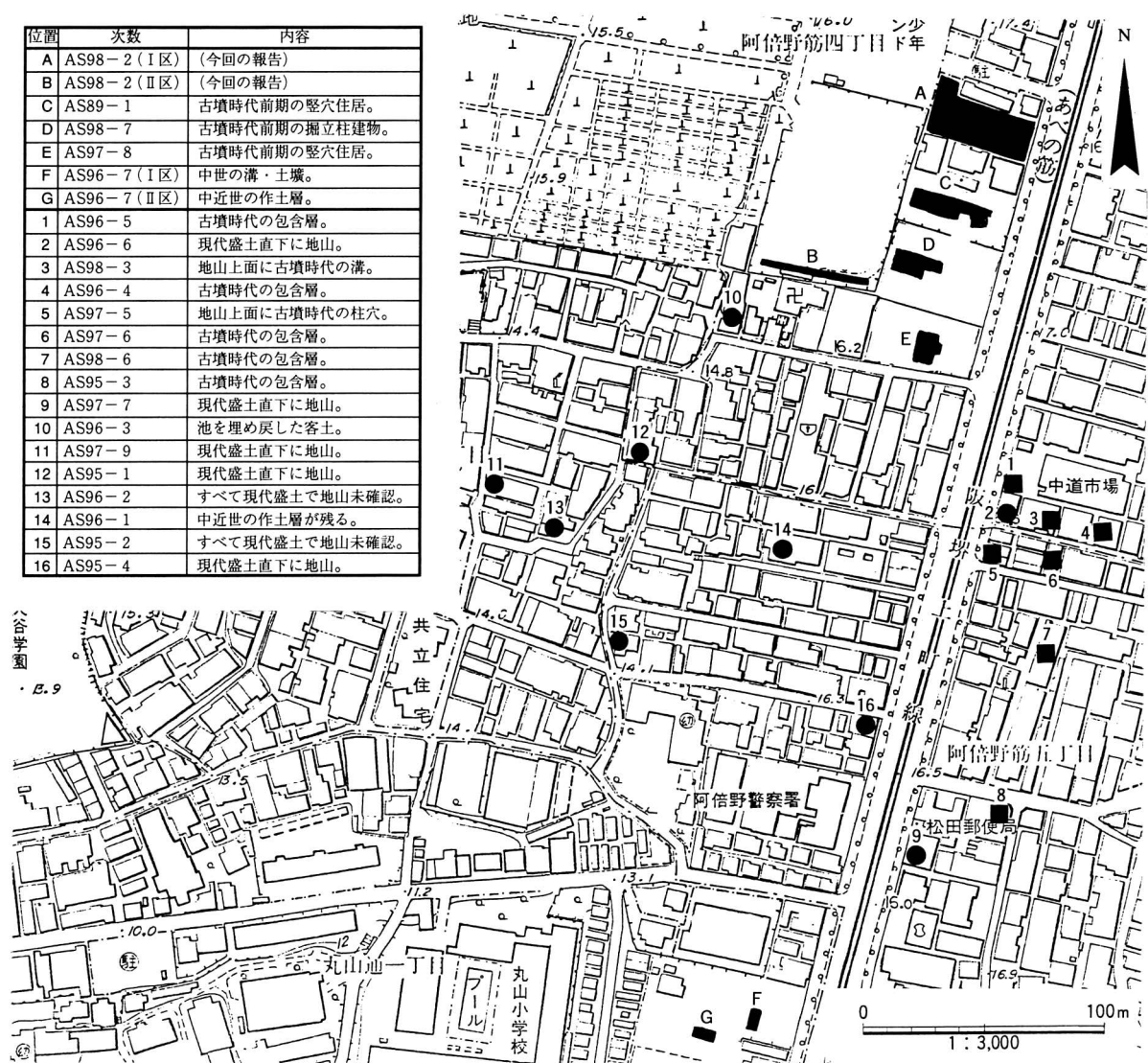


図5 過去の調査区と立会調査の位置

(■は遺構・包含層が確認された地点)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査は1998年5月11日に開始した。まず、各トレンチの周囲のフェンス設置および発掘資材の搬入などを行った上で、14日よりⅠ区の重機掘削を開始した。重機掘削では中世の作土層の途中までを除去し、以下はすべて人力で掘削した。また、調査区内では長軸の方向をもとに図6のように地区分けをして、遺物の取り上げ、遺構の記録に利用した。

地山上面まで調査が進んだ時点で、古墳時代前期の竪穴住居・掘立柱建物・土壇・溝などの遺構を確認した。竪穴住居や掘立柱建物、一部の土壇については当初設定された調査区のさらに外に拡がるため、可能な範囲で調査区を拡げた。各遺構や遺物の出土状況については適宜実測・写真撮影などの記録を行った。特に竪穴住居については部分的に破壊されてはいたものの、非常に良好に残っていたことから、テントで覆って、埋土の乾燥を防止しながら慎重に調査を進めた(写真1)。8月19日にはすべての遺構を完掘して、全景写真を撮影し、20日には朝日航洋株式会社による空中写真測量を実施した。27日にはすべての実測・写真撮影を終了し、9月9日に埋め戻しを含めたすべての復旧作業を完了した。

Ⅱ区は5月28日から重機掘削を開始した。試掘では中近世の包含層が残っていると報告されたが、掘削の結果、近代になって埋められた池の埋戻土であることが明らかになった。池の底は現在の地表面から約2.5m下にあり、断面と平面の簡単な記録をとって、6月24日に埋め戻しを完了した。

なお、今回の報告の内容はⅠ区を主体とするものであり、特に断らない限り調査区とはⅠ区を指す。



写真1 作業風景

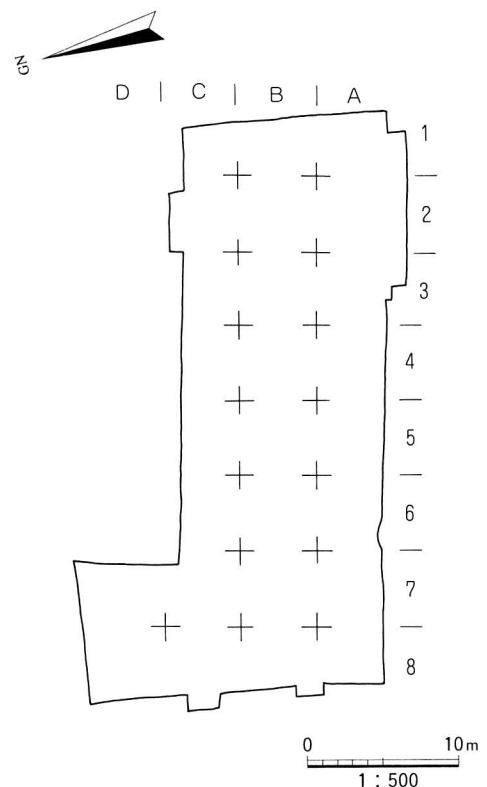


図6 Ⅰ区地区割

第2節 層序と出土遺物

1) 層序(図7、図版1)

調査地の現地表面は阿倍野筋に面する東端がTP+17.0mであるのに対し、西端はTP+17.2mと若干高くなる。これは地表下に東端で約40cm、西端で約80cmの現代盛土があるためであり、現代盛土の基底面を比べると西端の方が東端より約20cm低い。地山は北東部がもっとも高く16.5mであり、逆に南西端がもっとも低く15.9mであった。現代盛土と地山の間の地層は3層に区分される。

第1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)含細礫細粒砂質シルトの作土層である。染付の破片を含んでいることから、近世以降に該当する。調査区の東端で畠跡SX101を検出した。なお、今回の調査では東端以外はすべて重機で掘削した。

第2層：暗褐色(10YR3/4)極細粒砂質シルトの作土層である。弥生土器・土師器・須恵器の他に瓦器や瓦質土器・白磁片も含まれる。本層下面で耕作溝と土壌を検出した。

第3層：褐色(10YR4/4)極細粒砂質シルト層である。出土遺物の大半が古式土師器であるが、石器・弥生土器に加え、上部では須恵器や平瓦の破片も出土した。なお、本層の下面では竪穴住居・掘立柱建物・溝・土壌・ピットなど古墳時代の遺構を検出した。

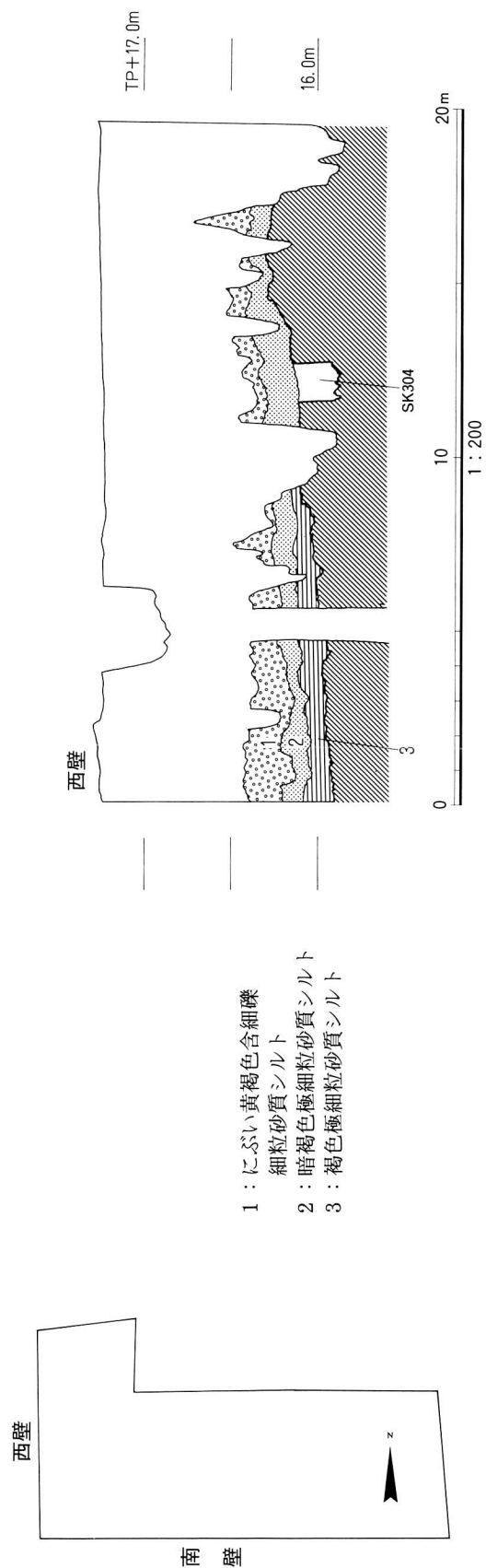
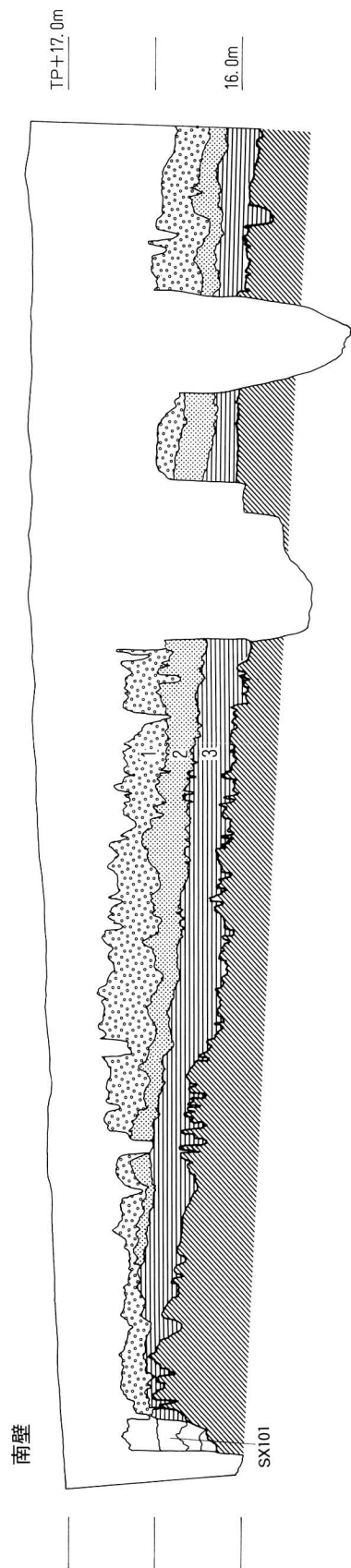
なお、埋め戻し作業の合間に、重機で調査区中央の地山層を掘削して、TP+12.0mまでの地層の調査を行った。その結果、地山上面からTP+13.7mまでは明褐色砂礫層で、それ以下は黄褐色細粒砂層であった。前者が淡水成層、後者が海成層と思われる(註1)。

2) 石器遺物(図8・9、図版12)

今回の調査ではサヌカイト製の石器遺物が全部で53点出土した。その内訳はナイフ形石器1点、細部調整のある剥片1点、有茎尖頭器1点、石鏃13点、石匙1点で、そのほかはすべて剥片である。すべて遊離資料であるが、その多くは7・8区の第3層内でも地山に近いところから出土しており、原位置に近い位置であると考えられる。今回は製品のみを報告する。なお、石鏃の各部位の呼称や分類については[菅榮太郎1995]に従うものとする。

1は縦長剥片を素材にしたナイフ形石器である。主要剥離面の左側縁に細部調整が施されている。現存長5.7cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmで、先端は欠損する。2は横長剥片を素材として、一側縁に片面から細部調整を加えた剥片である。裏面には自然面が残る。3は有茎尖頭器の一部と思われる。両側縁は直線的で、斜め上から押圧剥離が施されている。基部と先端部が欠損しているが、現存部から判断して切先角は約20°になると推定される。

4～16は石鏃である。その内4～13は凹基式で、14～16は平基式である。4～6・8・9は作用部側縁が直線的で、逆刺が丸みをもつものでB-2類に該当し、10・11は逆刺が鋭く尖ることからB-1類である。7は作用部側縁が緩やかなS字形を呈し、逆刺に丸みがあることから、E類に該当する。また、平面形態が二等辺三角形に近い12はE-2類で、切先に近い側縁に屈曲がある13はF類である。



- 1 : にぶい黄褐色含細礫
細粒砂質シルト
- 2 : 暗褐色極細粒砂質シルト
- 3 : 褐色極細粒砂質シルト

図 7 層位断面図

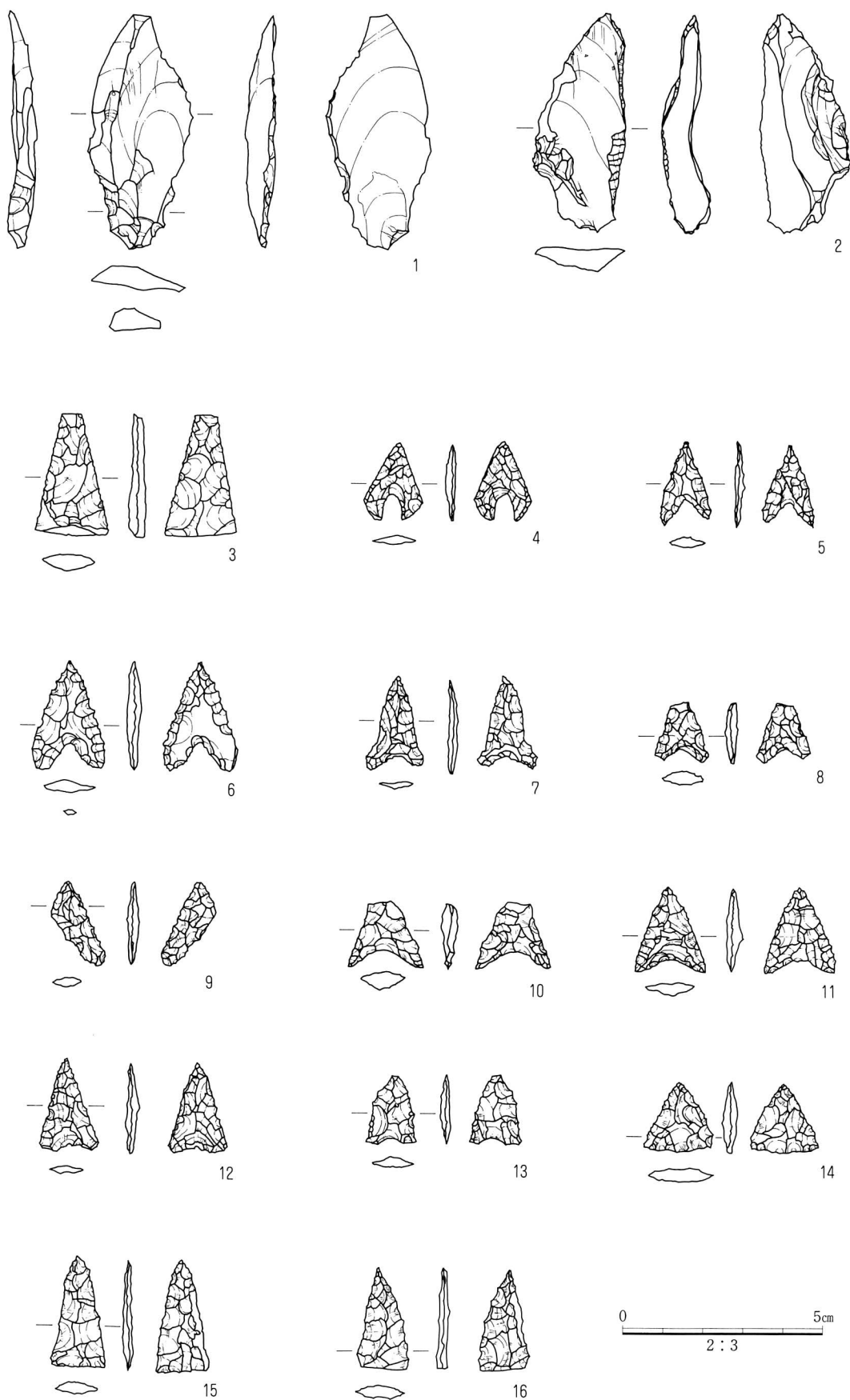


图8 石器遺物

ほぼ正三角形を呈する14は平基式であるが、A-1類に近いものと思われる。二等辺三角形に近い形態の15はE-1類に属する。16は基部を欠損するが、15と類似した形態になると思われる。

17は横長剥片を素材にした縦長の石匙である。両側辺に細部調整が施されており、一方は両面から施されているが、もう一方は片面のみである。全体的に調整は粗く、基部の端面には自然面が残る。長さ12.1cm、刃部幅3.4cm、厚さ0.8cmである。石匙は一般的には横長の形態のものが多く、長原遺跡のNG88-22次調査[大阪市文化財協会1995]やNG93-37次調査でも縦長の形態の石匙が出土している。

これらの石器の時期について、旧石器時代に属する1以外は縄文時代のもので、有茎尖頭器3は縄文時代草創期

に属する。また、ほとんどの石鏃は長原遺跡では長原12B・C層から9C層で出土する形態に類似することから、縄文時代中後期に属すると思われる。12・15については長原9A層に伴うことが多い形態であり、弥生時代前期になる可能性がある。

註)

(1) 地山調査では大阪市立自然史博物館の樽野博幸・石井陽子両氏に現場でご教示を得た。

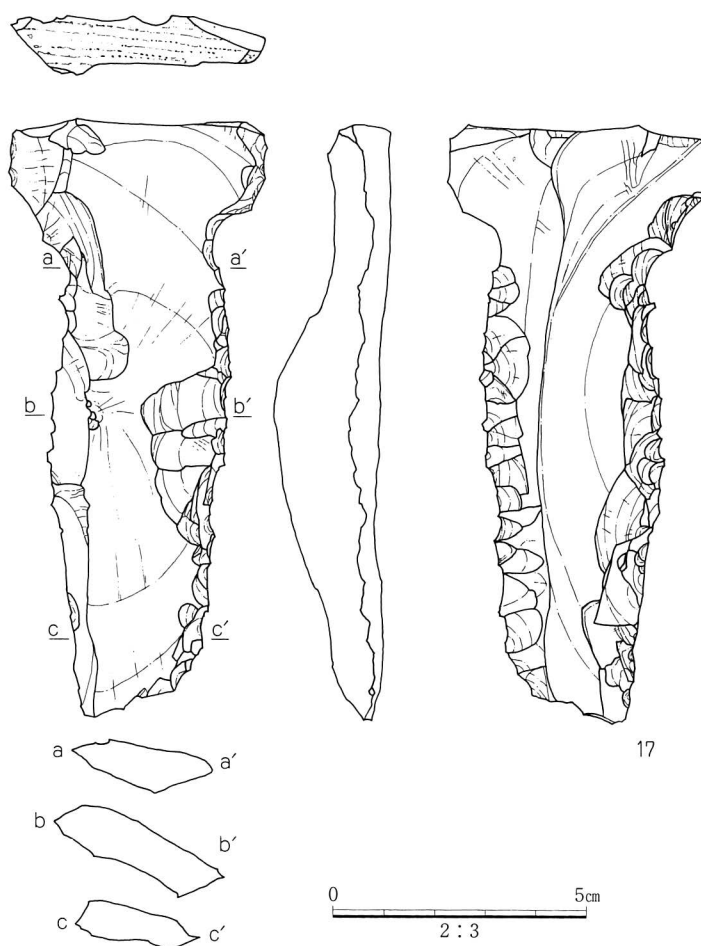


図9 石匙

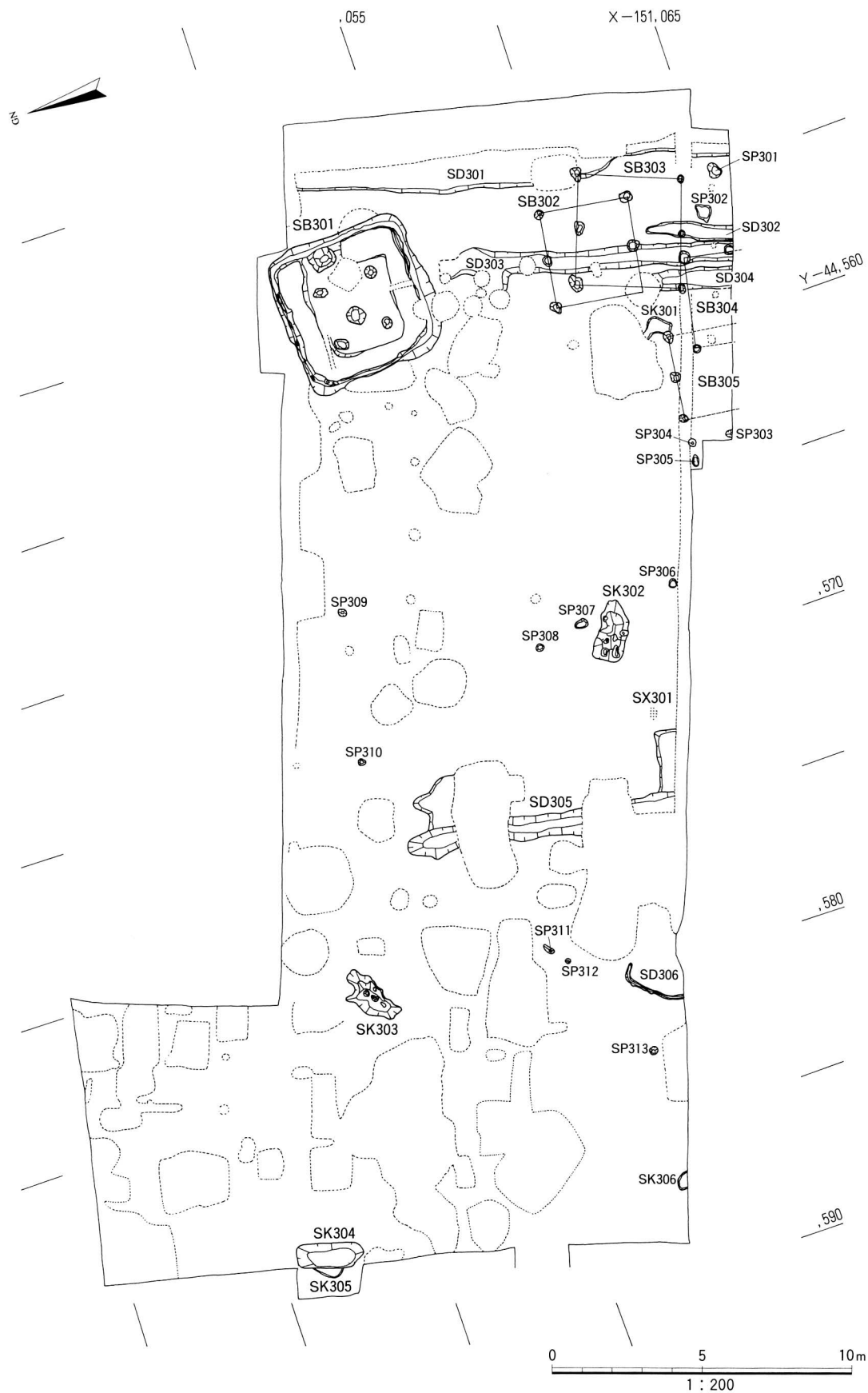


図10 古墳時代の遺構配置図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

地山上面で古墳時代の遺構を検出した(図10)。ほとんどが古墳時代前期に属するもので、地山が高い東側で竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が集中し、地山の低い西側では希薄になるのが特徴である。

1) 竪穴住居

SB301(図11～15、図版2・5・13・14・17) 2C区に位置する竪穴住居である。平面形は一辺4.4mの正方形で、床面の深さは検出面から約40cmである。床面は地山の削り出しで、その上面から4個の支柱穴、炉、屋内土壌が掘られていた。支柱穴は南西のものは直径20cm、深さ15cmと小さいが、それ以外は直径、深さともに30cm程度である。北東と南東の柱穴には直径10cmあまりの柱痕跡が残っ

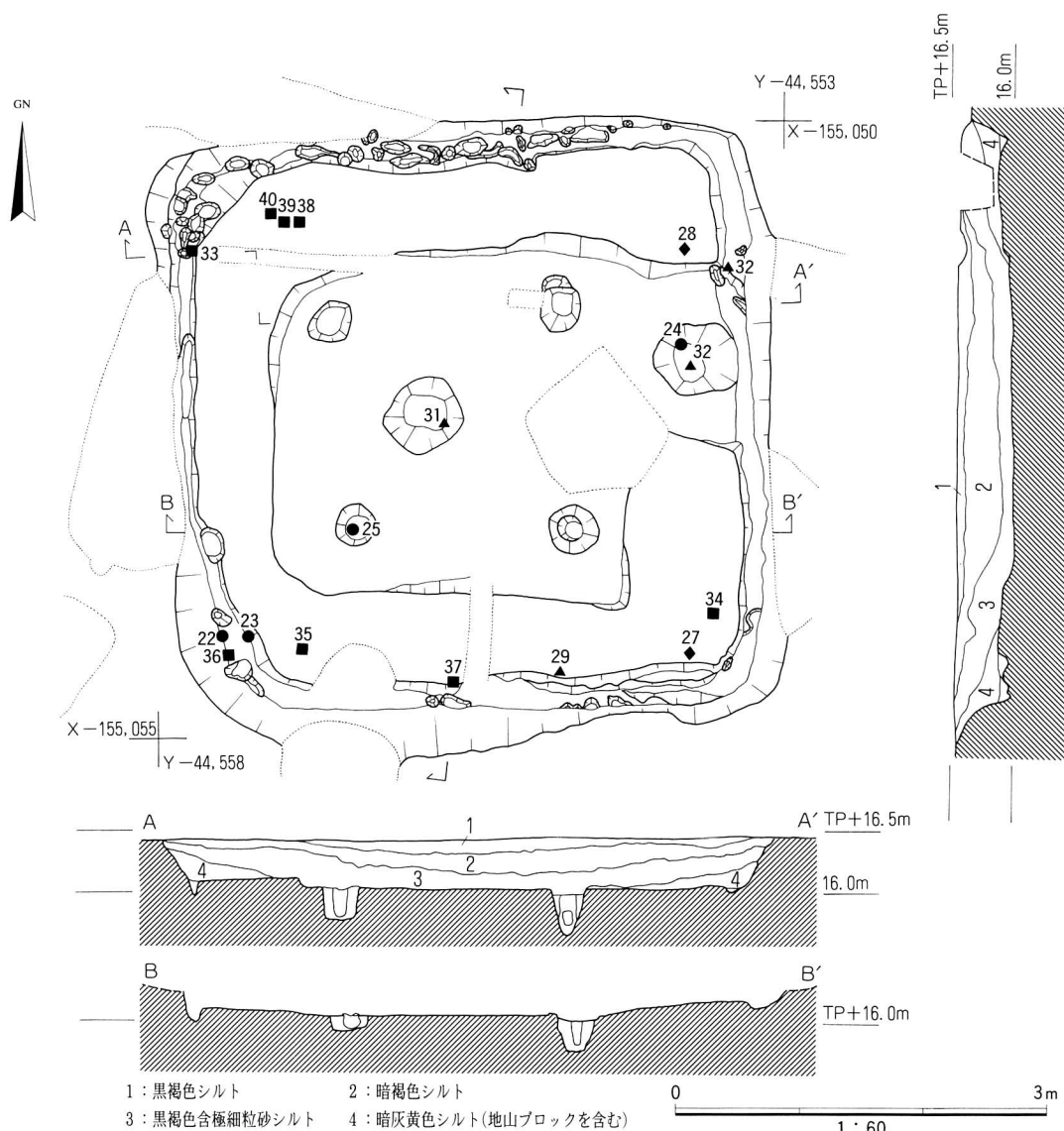


図11 SB301実測図

(●が壺22～25、◆が甕27・28、▲が小型丸底土器29・31・32、■が小型鉢33～40の出土位置を指す)

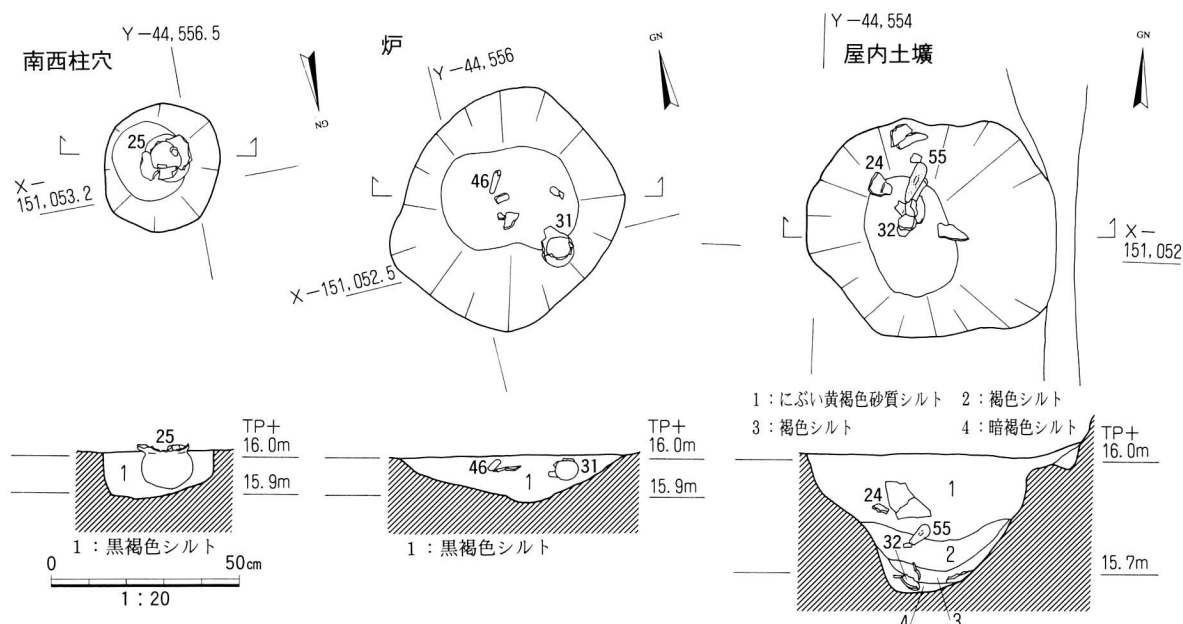


図12 SB301各遺構実測図

ていたが、南西の柱穴には柱を抜き取った後に壺25が口縁部を上に向けて埋納されていた。柱穴の間隔は、北西と南西の柱穴が1.6mである以外はすべて1.8mであった。四周には幅20cm、深さ5cmの壁溝があり、北側の壁溝内には径5cm程度のピットが多数見られた。北側と南側の壁溝は重複し、内側が外側に切られていたが、柱穴の重複は見られないことから建替によるものではなく、造成時の変更によるものと思われる。

炉は住居の中央からやや西寄りのところにあり、径60cm、深さ10cmで、小型丸底土器31が出土した。埋土中には炭が少量含まれていたが、焼土面はなかった。ベッド状遺構は床面と同様に地山の削出しで、東壁中央を除く四周にとりつく。幅は西辺が60cmで、それ以外の辺は80cmある。高さは5cm程度しかなく、特に南側の段ははっきりしない。また、AS89-1次のSB01とは異なり、段の下には溝はなかった。ベッド状遺構が途切れる東側の壁際には屋内土壌が掘られていた。南北55cm、東西60cmの隅丸方形を呈しており、床面からの深さは36cmある。埋土の最下層は水漬きの堆積物で、土壤洗浄したところ玉54を検出した。

なお、この竪穴住居の埋土は4つに区分される。4層は地山ブロックを含む暗灰黄色シルト層で、廃絶後の早い時期に形成されたものと思われる。3層からは古式土師器しか出土していないが、2層からはTK10型式の須恵器杯身19が、1層からは飛鳥Ⅲに該当すると思われる須恵器平瓶18が出土した。また、床面直上からは布留式期Ⅰに属する古式土師器が出土した。北西隅では小型鉢33・38～40が、南西隅では壺22・23と小型鉢35・36がまとまっており、南東隅では甕27と小型鉢34が破砕された状態で出土した。

18は口径7.8cm、器高は13.4cm、体部径15.6cmの須恵器平瓶である。体部の最大径は上半にあり、全体的に丸みがある。天井部は一旦塞がれたあと、中心から外れたところを切込んで口縁部を付けている。体部下半はヘラケズリで仕上げられているが、そのほかはヨコナデである。類似した器形のものが瓜破遺跡(NG84-24次)のSE01などでも出土しており、それが飛鳥Ⅲの土器と共伴しているこ

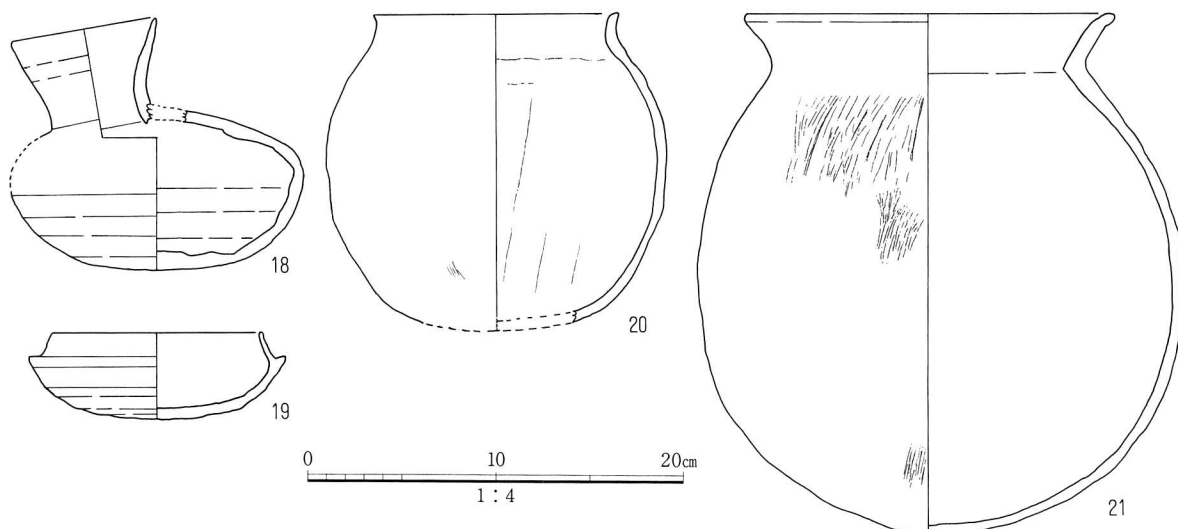


図13 SB301出土遺物(1)

1層(18)、2層(19~21)

とから[京嶋覚1992]、この平瓶も同じ頃のものと思われる。19は2層から出土した口径11.2cm、器高4.6cmの須恵器杯身で、ほぼ完形に復元できる。口縁端部は丸くおさまり、底部のヘラケズリは時計回りに施されている。TK10型式に該当する。20・21は土師器の甕である。20は口径13.0cm、残存高16.3cmで、短い口縁部に球形の体部をもつ。胎土中には5～6mm大の結晶片岩や長石の角礫を多く含んでおり、器面に二次焼成を受けた痕跡が見られる。日常の土器にはあまり見られない形態であり、結晶片岩を含んでいることから紀ノ川流域の製塩土器の可能性もある。21は口径19.6cm、体部径25.6cm、器高27.7cmで、外反した口縁部にやや長胴ぎみの体部をもつ。器面が荒れているが、体部外面にわずかにハケメが残っている。また、頸部内面のやや下がったところに弱い稜があることから、内面にはヘラケズリが施されていたものと思われる。

22は口径12.2cm、体部径17.4cm、残存高17.3cmの長頸壺である。残存部は約1/4であり、器面の残りが悪く、口頸部の外面にハケメがわずかに観察できるのみである。23は口径12.3cm、器高17.5cm、体部径14.4cmの壺である。口縁部は稜のあまい二重口縁であり、頸部は緩やかに屈曲し、なで肩ぎみの体部に移行している。体部は下半が張る無花果状の形態である。外面はタテハケが施されており、頸部は強いヨコナデでハケメが消されている。内面は下半が左上り、上半が右上りのヘラケズリである。胎土中には長石・シャモット粒を含む。屋内土壌から出土した24は口径20.0cmに復元された二重口縁壺の口縁部で、山陰系もしくは吉備系の可能性がある。南西柱穴から出土した25は口縁部が短い壺で、口縁端部を欠損する。残存部の口径は11.8cm、残存高12.1cm、体部径13.1cmである。口縁部は「く」の字に屈曲して、斜めにまっすぐ延びる。体部は扁球形で、最大径は中央にある。体部の外面はヨコハケのあと、粗いミガキが施されている。内面はヘラケズリである。26は二重口縁壺の口縁部である。外面には列点文と2条の沈線が施され、沈線の間には円形浮文が貼付けられている。器面が荒れており、円形浮文に竹管文が施されているかどうかは確認できない。

27・28は甕である。27は体部上半と下半は接合しないが、同一個体と考えて図上で復元した。口径は13.2cm、体部径22.0cm、推定器高は23.0cmである。口縁部は直立ぎみの二重口縁で、側面には擬

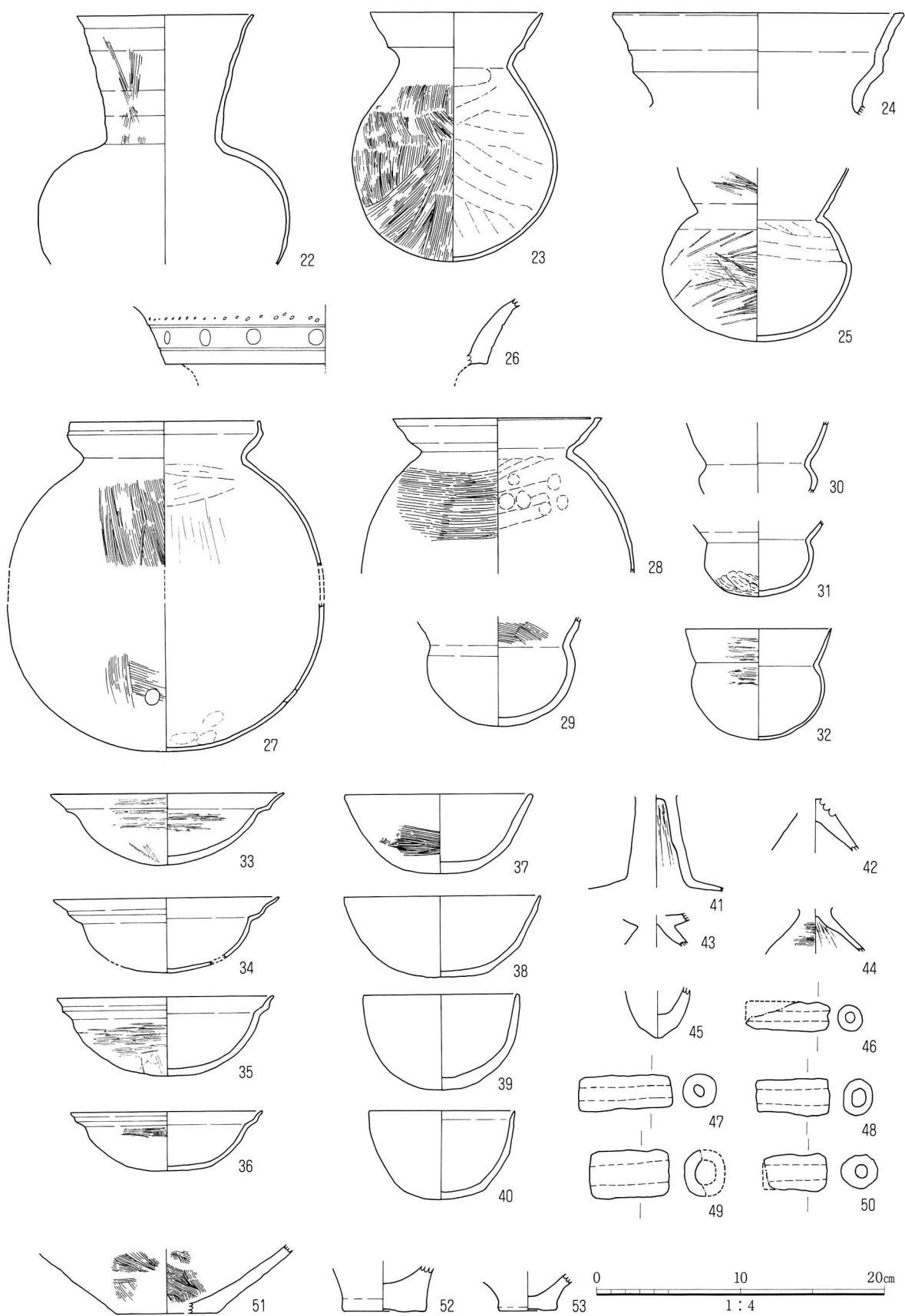


图14 SB301出土遺物(2)

3層(30·41·42·47~50·52·53)、4層(22·23·26~29·33~44·51)、南西柱穴(25)、炉(31·46)、屋内土壇(24·32·43·44)

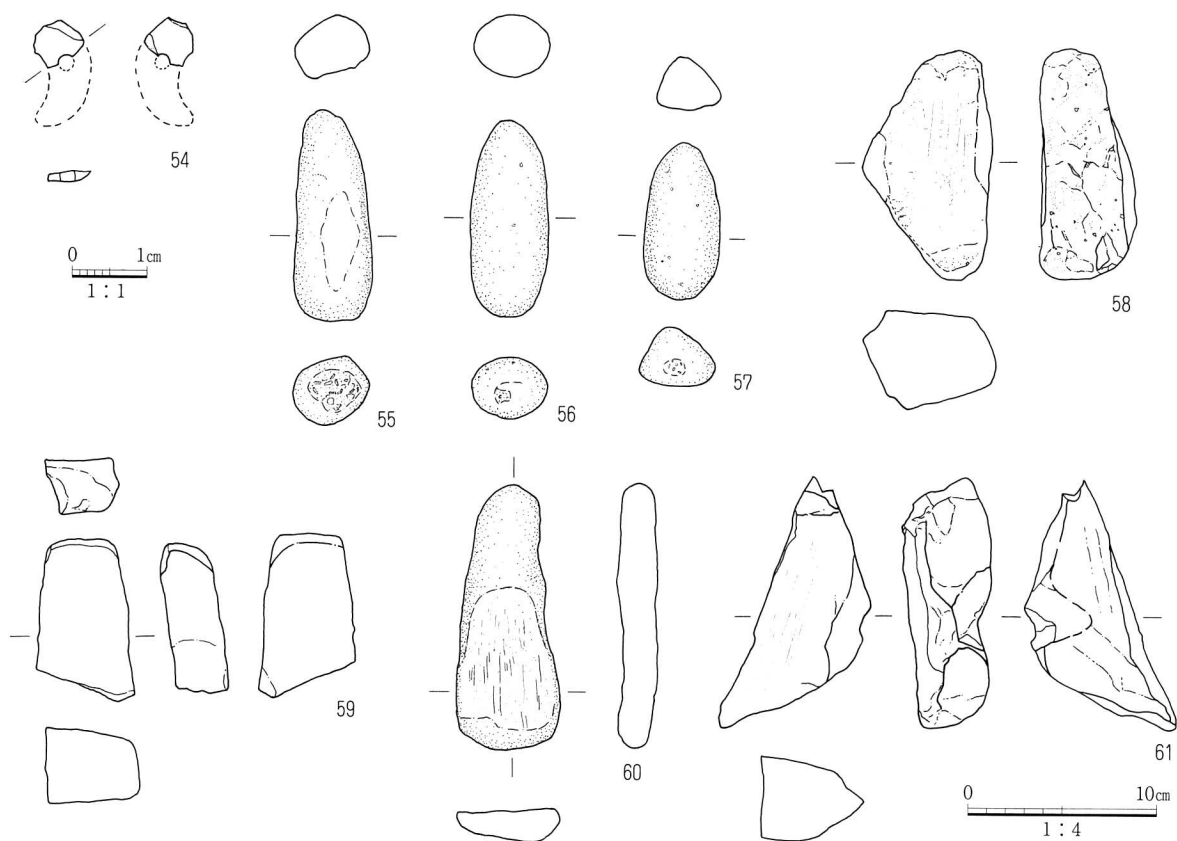


図15 SB301出土遺物(3)

2層(61)、3層(56・58～60)、4層(57)、屋内土壌(54・55)

凹線は見られない。体部の外面にはタテハケが施されている。内面はヘラケズリであり、底部付近にはユビオサエが見られる。体部の下半には焼成後の穿孔がある。胎土中には長石・シャモット・チャートの細かい砂粒が含まれており、在地産であろうが、形態的な特徴は吉備系であり、[高橋護1991]の10-e期に該当すると思われる。28は口径14.4cm、体部径19.0cmの布留式甕の上半部で、約1/4が残存する。口縁部は内湾ぎみに延びており、端部は上方に面をもつ。外面はヨコハケで仕上げられており、内面は右上りのヘラケズリが施されている。ヘラケズリは頸部よりやや下で仕上げられるため、頸部の屈曲は丸みを帯びている。

29～32は小型丸底土器である。29は器壁が厚く、口縁部内面の調整はハケメである。30～32は器壁が薄く、31の底部にはヘラケズリが、32の外面にはミガキが施されている。なお、32は床面と屋内土壌の底から出土した破片が接合したものである。33～36は有段口縁の小型鉢で、口縁部の立上がりなが長い33・34と短い35・36がある。外面には粗いミガキが施されている。37～40は半球形の小型鉢である。口径が大きい37・38と、口径が小さく、やや深めの39・40がある。なお、37はSB301から約20m南に位置するSK303で出土した破片と接合した。41は高杯の脚部で、杯部と脚裾端部が欠損している。脚内はナデで仕上げられており、粘土紐の継ぎ目が残っている。42～44は小型器台の脚部である。いずれも器面の残りは悪いが、44には横方向のミガキが残っている。

漁具としては飯蛸壺45、管状土鍾46～50がある。45は尖りぎみの底部である。51～53は弥生土器で、51は壺、52・53は甕の底部である。いずれも混入品と思われる。54は幅6mm、厚さ1mmの滑石

製の玉である。残存している部分が弧を描いていることから、小型の勾玉の可能性はある。石器には敲石55～57と砥石58～61がある。58は花崗斑岩、61は玄武岩質安山岩で、その他は砂岩である。55には顕著な敲打痕が見られる。

2) 掘立柱建物(図16、図版6・7)

SB302 東西2間(3.2m)、南北1間(2.9m)の掘立柱建物である。東西の柱間隔の平均が1.6mであるのに対し、南北が2.9mと広いのが特徴である。いずれの柱穴にも柱を抜き取った痕跡が残っていた。柱穴の埋土から粗いタタキが施された甕の体部片が出土した。

SB303 東西2間(3.6m)、南北1間(3.5m)の掘立柱建物である。東西の柱間隔が平均1.8mであるのに対し、南北は3.5mと広いのが特徴である。各柱穴で直径10cm程度の柱痕跡が確認された。柱穴埋土より土師器の細片が出土した。

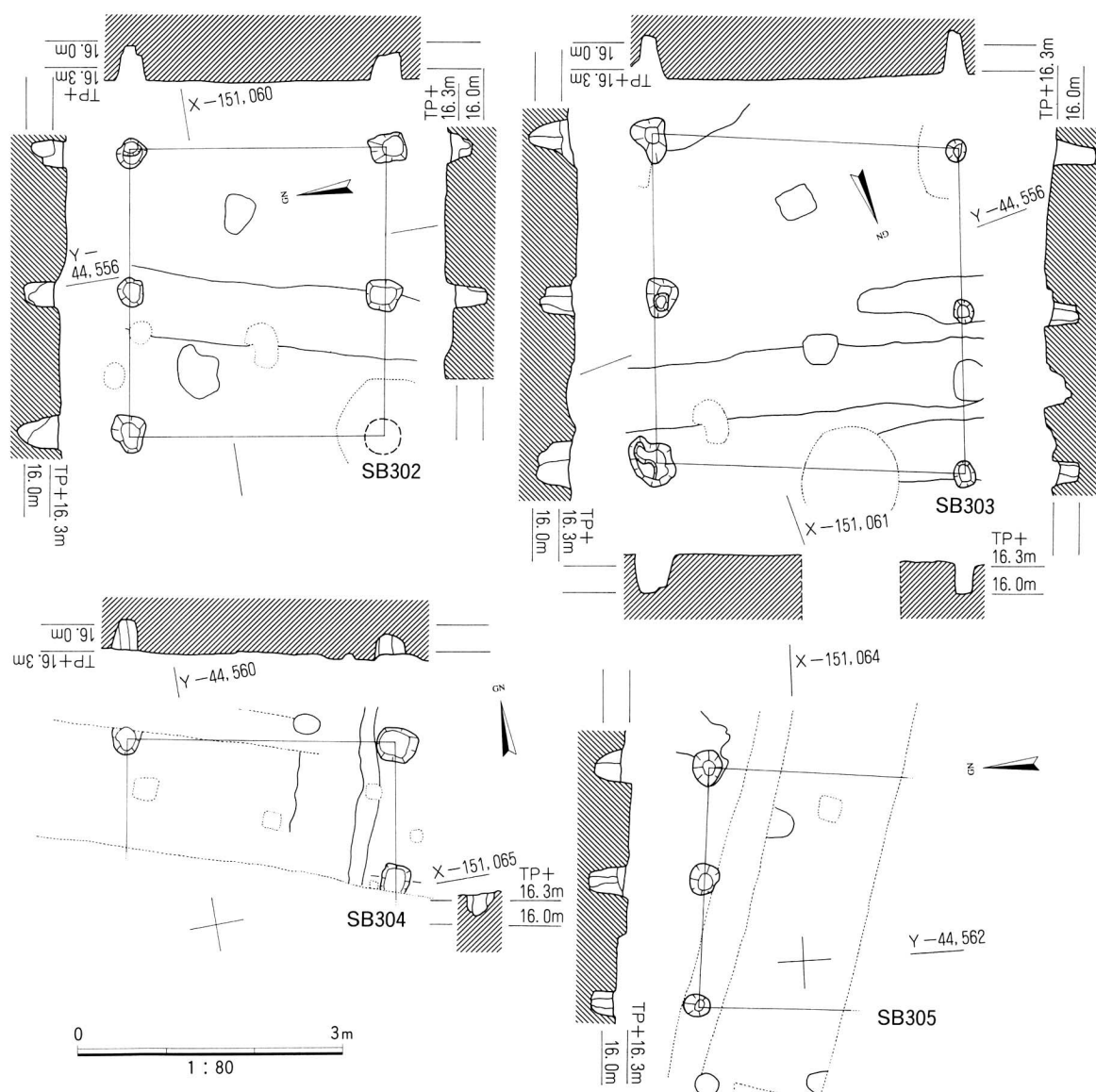


図16 掘立柱建物実測図

SB304 2A区に位置する。検出された柱穴は3個のみであるが、本来、東西1間、南北2間の掘立柱建物であったと推定される。東西1間(3.0m)、南北1間(1.6m)以上であり、柱穴には直径10cm程度の柱痕跡が残っていた。柱穴埋土より土師器の細片が出土した。

SB305 2A区から3A区に位置する3個の柱穴の列で、これらが南北に続かないことと、**SB302・303**がいずれも東西2間であることから、同様の掘立柱建物の北側の柱穴列と判断した。各柱穴には直径10cm程度の柱痕跡が残っていた。柱穴埋土から生駒西麓産の庄内式甕の口縁部片が出土した。

3) 溝

SD301～304(図10) 調査区の東側で検出した。**SD302～304**は南北に平行して延びる溝で、いずれも北側で底が高くなって消える。深さは5cm前後と浅く、遺物も土師器の細片しか出土しなかった。**SD301**は西肩のみを確認したが、東側を**SX101**で削られており、本来は**SD302～304**と同様の浅い溝であったと思われる。なお、**SD302～304**の下面では**SB302～304**の柱穴を検出した。

SD305(図17、図版8) 調査区の中央で検出した幅0.8m、深さ0.2mの南北方向の溝である。北側で東側に不整形に拡がって消えて、南側では東側に枝分れする。埋土中より弥生土器甕**62・63**、古式土師器壺底部**64**、高杯**65**、飯蛸壺**66**、須恵器杯蓋**67・68**、砂岩製の砥石**69**が出土した。**67・68**は口径15cm前後、器高4.2cmで、口縁端部は凹線状に浅く凹み、TK10型式に該当することから、こ

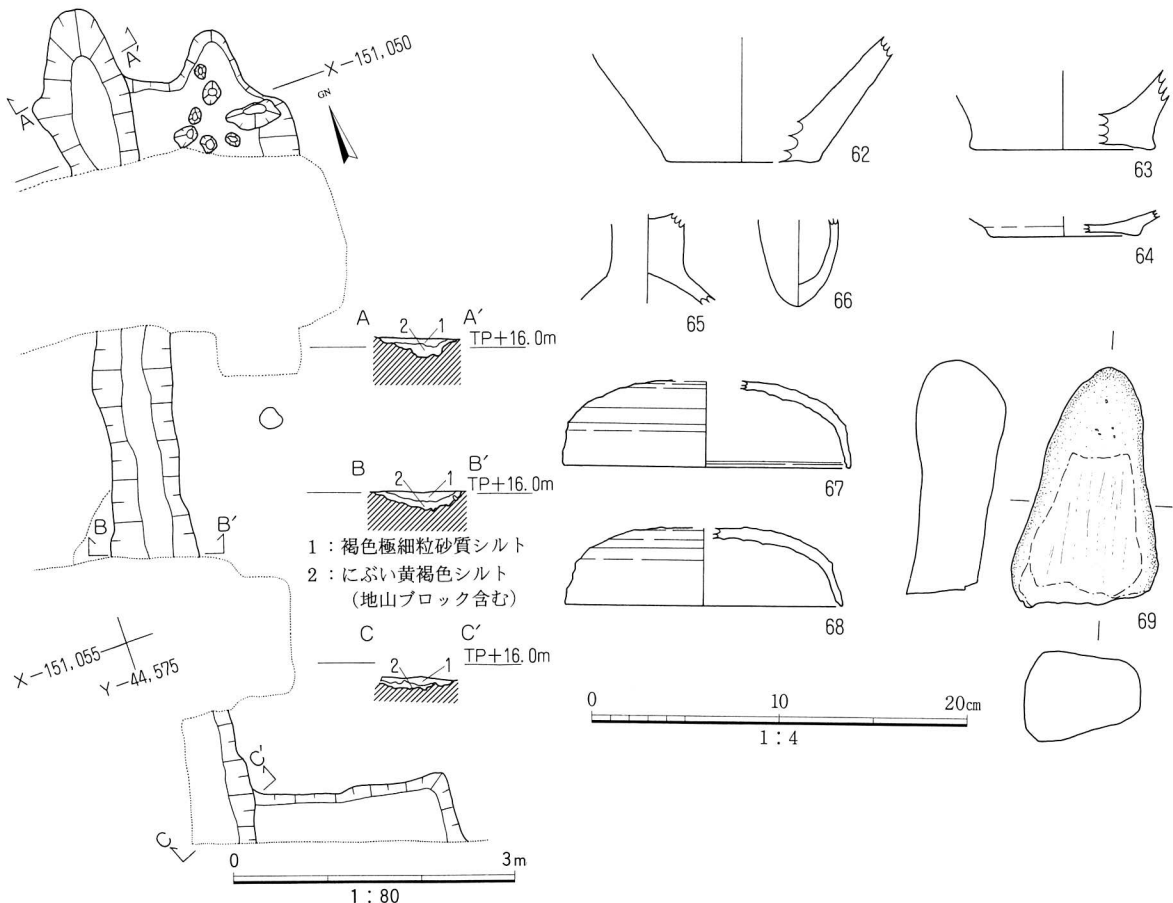


図17 SD305と出土遺物

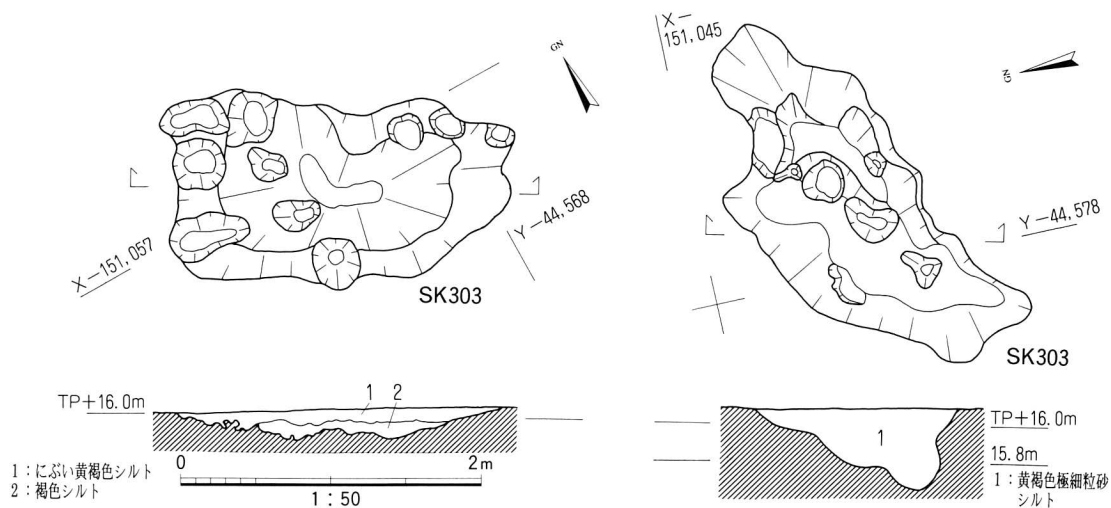


図18 SK302・303実測図

の溝の年代は6世紀中葉以降と思われる。このほか埋土中から須恵器甕の体部片が数点出土した。

SD306(図10) 7A区で検出した幅15cm、深さ8cmの溝で、L字に屈曲する。竪穴住居の壁溝の可能性も考えられるが、周辺で柱穴は検出されず、遺物もまったく出土しなかった。

4) 土壇

SK301(図10) 2A区に位置する土壇で、SB305の柱穴に切られていた。遺物は出土しなかった。

SK302(図18) 4A区に位置する、東西2.0m、南北0.9m、深さは0.25mの土壇である。底には窪みが多くある。粗いタタキが施された古式土師器甕の細片が出土した。

SK303(図18・19、図版8・15) 7C区に位置する不整形で底に窪みが多い土壇である。埋土中には土器片が多量に含まれていたが、まとまって投棄されたというよりも、埋土に混入したような状態で出土した。遺構の状態から風倒木痕の可能性はある。出土遺物には古式土師器甕70～75、鉢76、

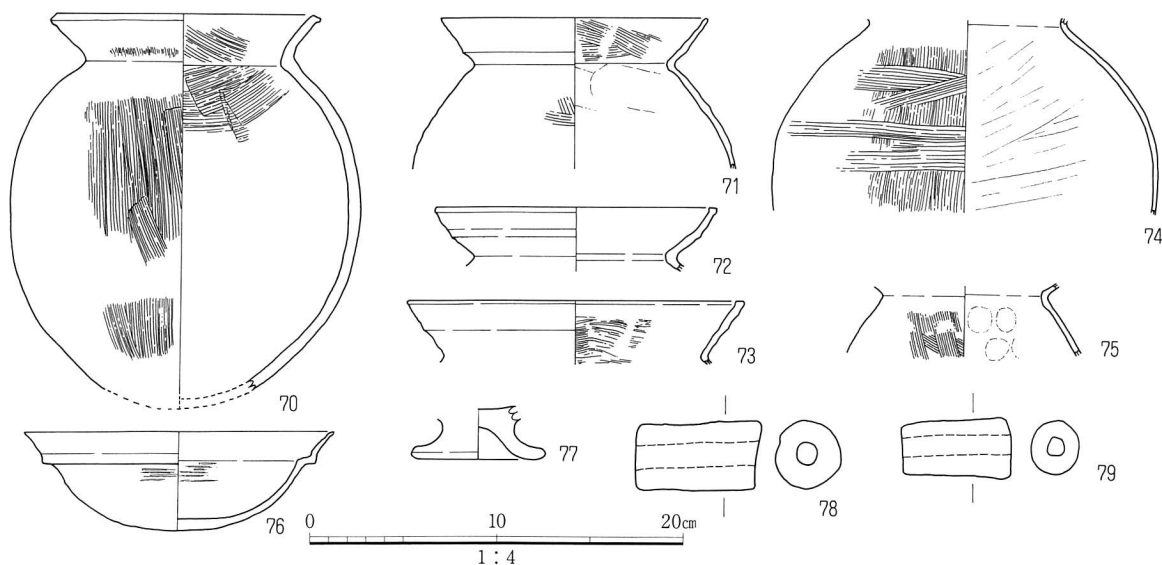


図19 SK303出土遺物

脚部77、管状土鍾78・79がある。

70は口径13.8cm、体部径19.0cm、残存高20.0cmの甕である。口頸部は「く」の字に屈曲して直線的に延び、口縁端部は外傾する面をもつ。外面には5条/cmの粗いハケメが縦方向に施されており、口頸部は横方向のナデでハケメが消されている。内面は口頸部と体部上半にはハケメが施されているが、体部下半はナデのみである。器壁は比較的厚く、体部の最大径付近は6mmある。71～74は布留式甕である。74は約1/3残存する甕の体部上半で、体部径は20.4cmである。外面にはタテハケののちヨコハケが施されており、内面には頸部の下まで右上りのヘラケズリがある。器壁は薄く3mm前後である。75は頸部径が9.0cmに復元できた小型の甕の体部である。胎土に角閃石粒を含み、口縁部が強く外反しており、頸部下の内面に多数の指頭圧痕が残ることから、讃岐系の土器の可能性はある。76は口径12.6cm、器高5.6cmの有段口縁の小型鉢である。口縁部と体部は接合しないが、同一個体と判断して図上復元した。内外面にミガキが施されている。77はおそらく小型の台付鉢の脚部と思われる。78・79は管状土鍾である。78は長さ6.7cm、径3.6cm、孔径0.9cm、重さ106.9gで、今回の調査で出土した中でもっとも重いものである。

SK304(図20、図版9) 8C区で検出した土壌である。平面形は南北2.2m、東西0.8mの隅丸長方形で、深さは0.3mである。土師器の高杯の脚部片80が出土した。

SK305(図20、図版9) 8C区に位置しており、東側はSK304に切られている。南北0.46m以上、東西0.24m以上で、深さは0.2mである。底面および壁面が火を受けて赤変しており、底には炭が多量に堆積していた。鍛冶関係の遺構と想定して埋土を洗浄したが、炭以外は検出されず、この土壌の機能を類推させるようなものは検出されなかった。

SK306(図10) 8A区で検出した土壌で、南側は調査区外である。深さは10cm前後であり、遺物は出土しなかった。

5)その他の遺構

SP301～313(図10) 掘立柱建物以外のピットで、直径、深さともに15～20cmである。いずれも建物として組み合わせず、掘立柱建物SB302～305の柱穴と比べると浅い。

SX301(図21、図版10・15) 5A区で検出された。東西約60cm、南北約30cmの範囲から古式土師器の二重口縁壺81、甕82・83が、いずれも口縁部を下にして折り重なって出土した。第3層に含まれ、地山から約10cm浮いて出土しているが、遺構の輪郭は確認されなかった。

81は口縁部が欠損しているものの、ほぼ完形に復元できた。体部径15.2cm、残存高は14.9cmである。器表や破断面が

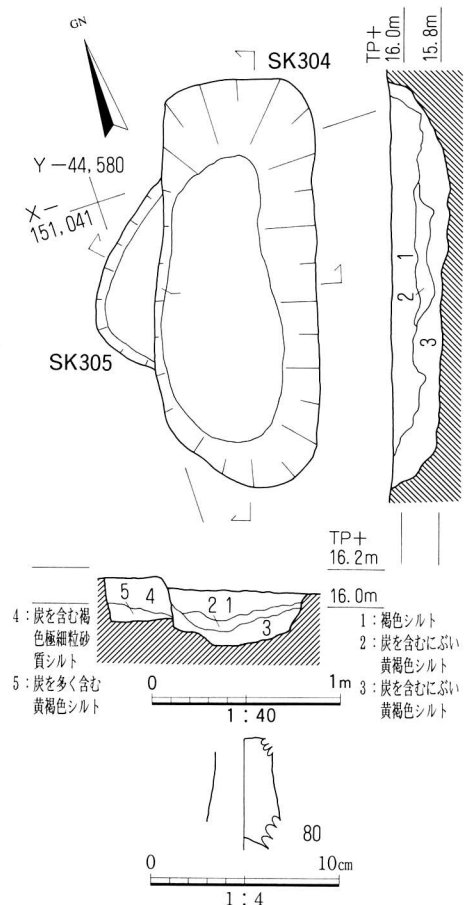


図20 SK 304・305と出土遺物

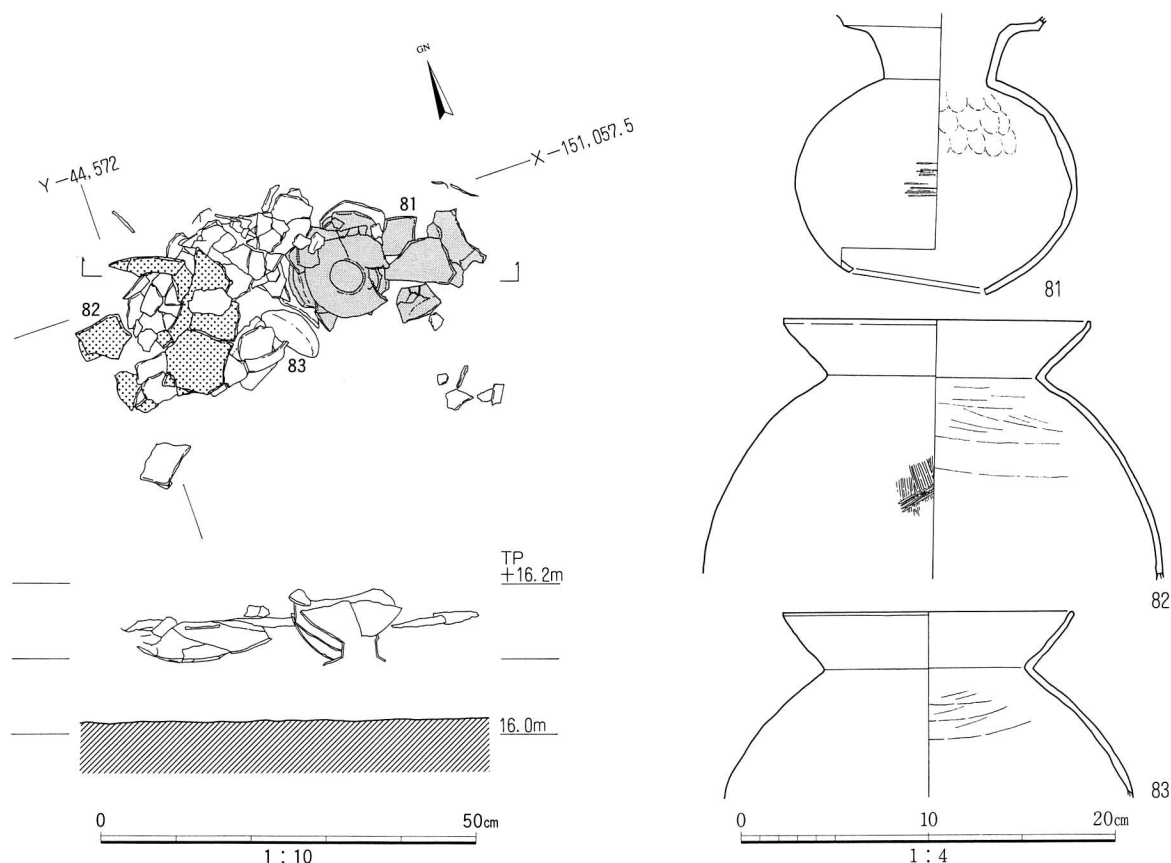


図21 SX301と出土遺物

かなり摩耗しているが、底部がきれいな円弧を描いて空くことから、底部に焼成前の穿孔があったと判断した。外面には横方向のミガキがわずかに残る。82は庄内式甕の系譜を引くもので、口径16.4cm、体部径25.2cmである。口頸部は「く」の字に屈曲しており、口縁端部をつまみ上げている。体部外面は8～9条/cmのタテハケで仕上げられているが、一部でタテハケの前に施された6～7条/cmの細かいタタキメが残る。体部の内面はやや左上りのヘラケズリで、頸部まで削り上げられているため、稜のある「く」の字を呈する。胎土に角閃石粒が含まれることから生駒西麓産である。83は口径15.6cm、体部径21.6cmの甕である。外面は器面が荒れて調整は観察できないが、内面は頸部の下までヘラケズリが施される。

6) 第3層出土遺物(図22～24、図版15～17)

84～87は弥生土器である。84は体部に櫛描文が施された壺の細片である。113は結晶片岩の破片で、石庖丁の可能性がある。甕90～97・99や壺98・100はおそらく古墳時代前期に属するものと思われるが、弥生時代後期に上がる可能性もある。93～98の底部には木葉の圧痕がある。89は古式土師器の甕の体部で、外面はハケメである。内面は左上りのヘラケズリが頸部まで削り上げられており、稜をもった「く」の字を呈する。胎土中には角閃石粒が含まれることから生駒西麓産である。101は長頸壺の口頸部で、頸部内面は「く」の字に屈曲する。胎土は生駒西麓産である。102は吉備系か山陰系の大型の鉢の口縁部片であり、図上で復元した。103～110は高杯の脚部で、105・108～110は中実であ

るが、その他は中空である。107は低脚高杯の脚部である。

111・112は3層の上部で出土した。111は口径13.8cmの須恵器甕である。体部にカキメが施され、その下に右上りの平行タタキがわずかに残っている。口縁部は外上方に直線的に延びており、端部は丸くおさめている。112は平瓦の破片で、凸面に縄タタキが施されており、凹面には布目が残る。阿倍寺に関係すると思われる唯一の遺物である。

漁具には管状土鍾114～151、飯蛸壺152、鉄器156・157がある。管状土鍾は第3層から全部で44

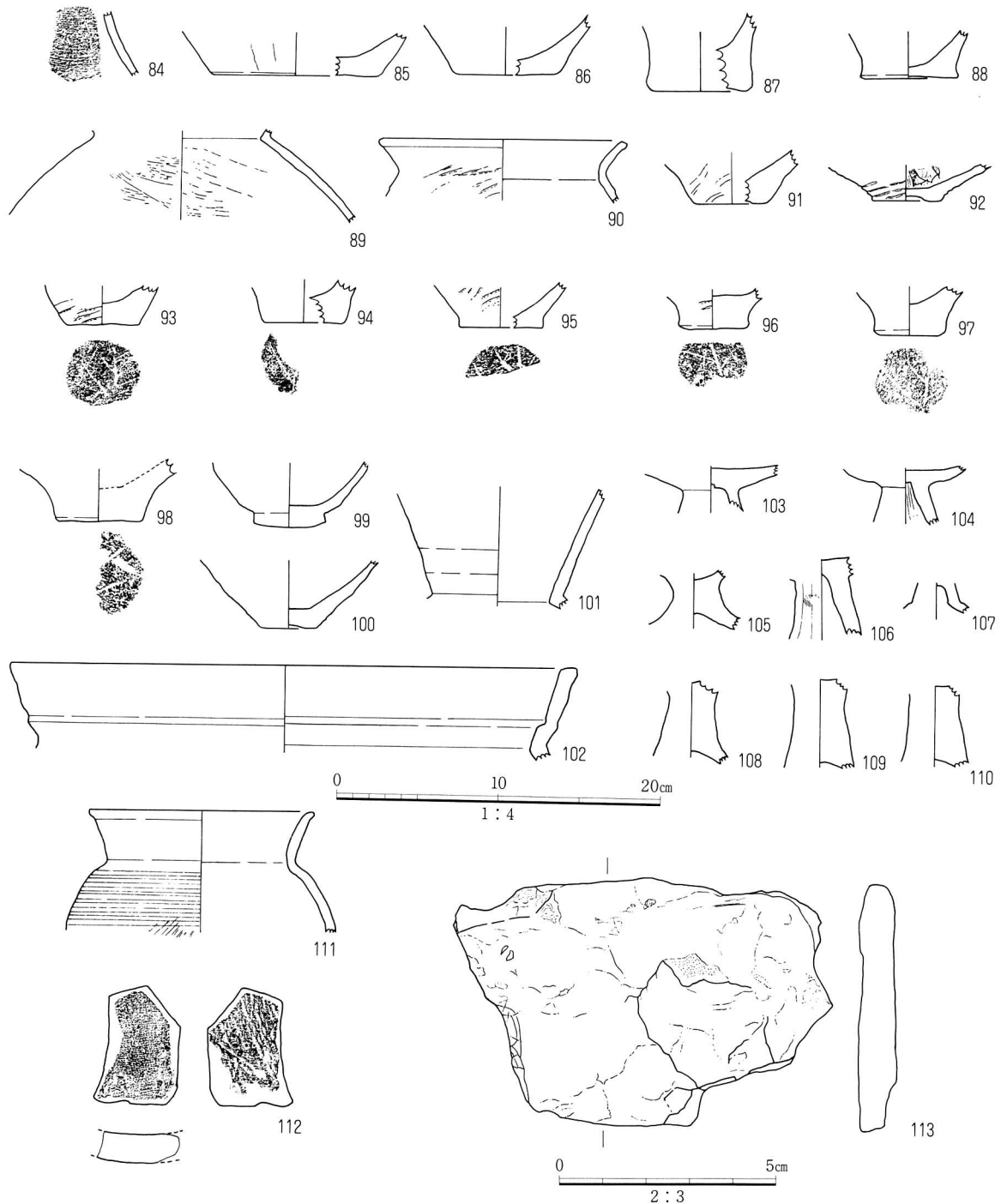


図22 第3層出土遺物(土器・石器)

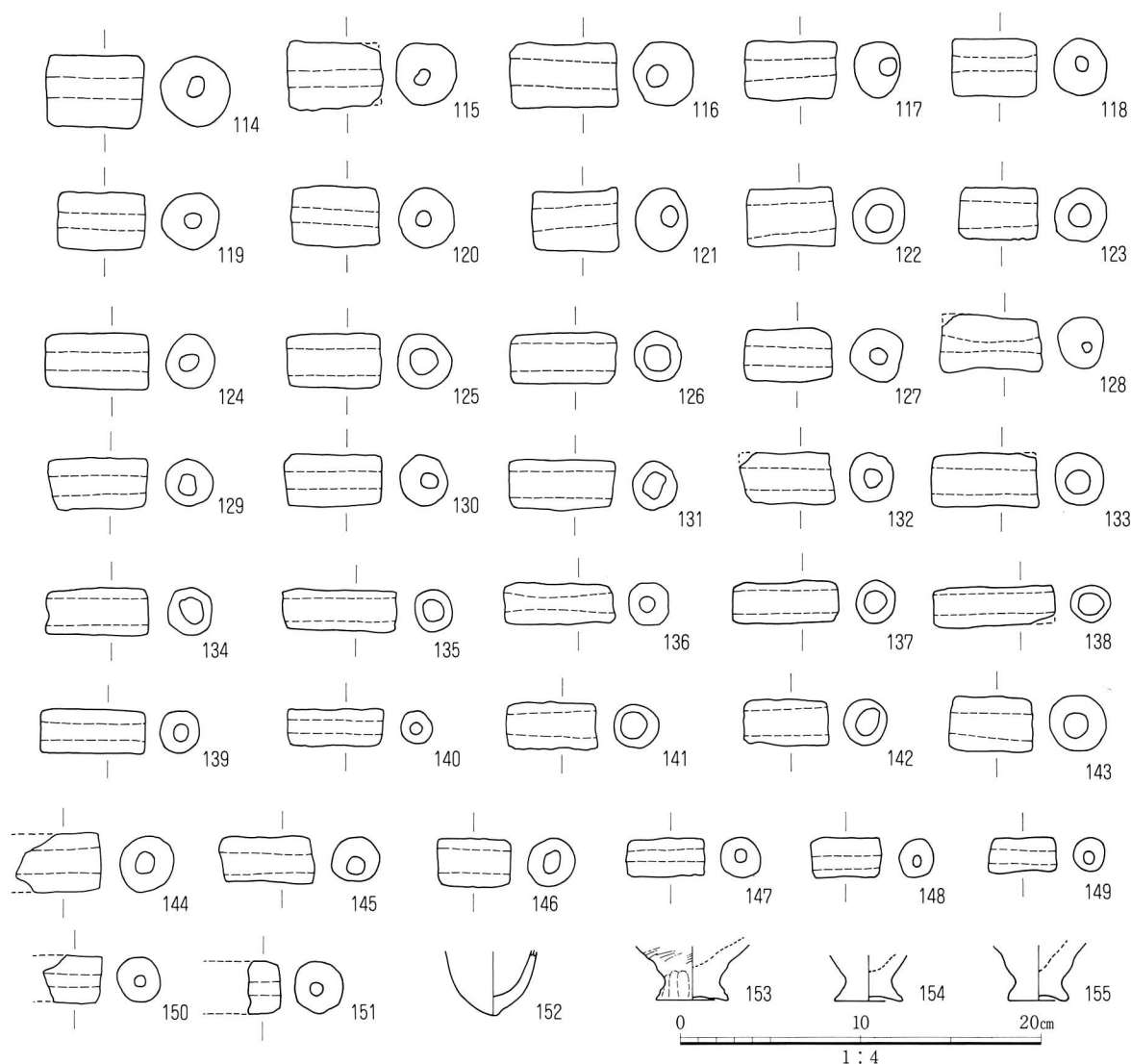


図23 第3層出土遺物(漁具・製塩土器)

点出土したが、実測可能な38点を掲載して、計測値は表1に示した。

156・157は鉄製刺突具で、おそらくヤスの先端と思われる。156は先端から3.8cm、157は7.7cm残っている。X線で見たとこ、いずれにも逆刺がある。

153～155は製塩土器の脚部である。3点とも二次焼成を受けて、ピンク色に変色している。その形態は脚台部の上底が約2mmで、下端から約1cmのところにくびれている。器面のもっとも残りのよい153には外面にタタキメとくびれ部にユビオサエが残る。いずれも[広瀬和雄1994]の脚台Ⅲ式に該当する。なお、大阪市内で脚台のある製塩土器は東淀川区崇禅寺遺跡[大阪府教育委員会1982]、平野区瓜破北遺跡[大阪市文化財協会1980]で出土している。

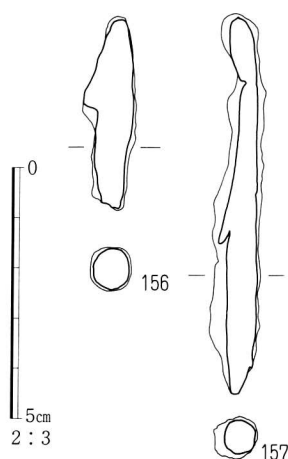


図24 第3層出土遺物(鉄器)

第4節 中近世の遺構と遺物

1) 中世の遺構と遺物(図25、図版17)

調査区全体で東西方向の耕作溝を確認したが、いずれも深さは2～3cmしかない。第2層内から鎌倉～室町時代の瓦器片や瓦質土器が出土した。なお、6C区で径約50cm、深さ約20cmの土壌SK201を検出したが、遺物は出土しなかった。

第2層からは158～181の遺物が出土した。158～163は弥生土器である。158は壺、159～161は甕の底部である。162は径0.9cmの孔が穿たれた甕の底部である。163は台形土器と思われる。いずれも弥生時代中期に属する。164～170は管状土錘である。170は長さ3.0cm、径0.5cm、孔径0.2cm、重さ

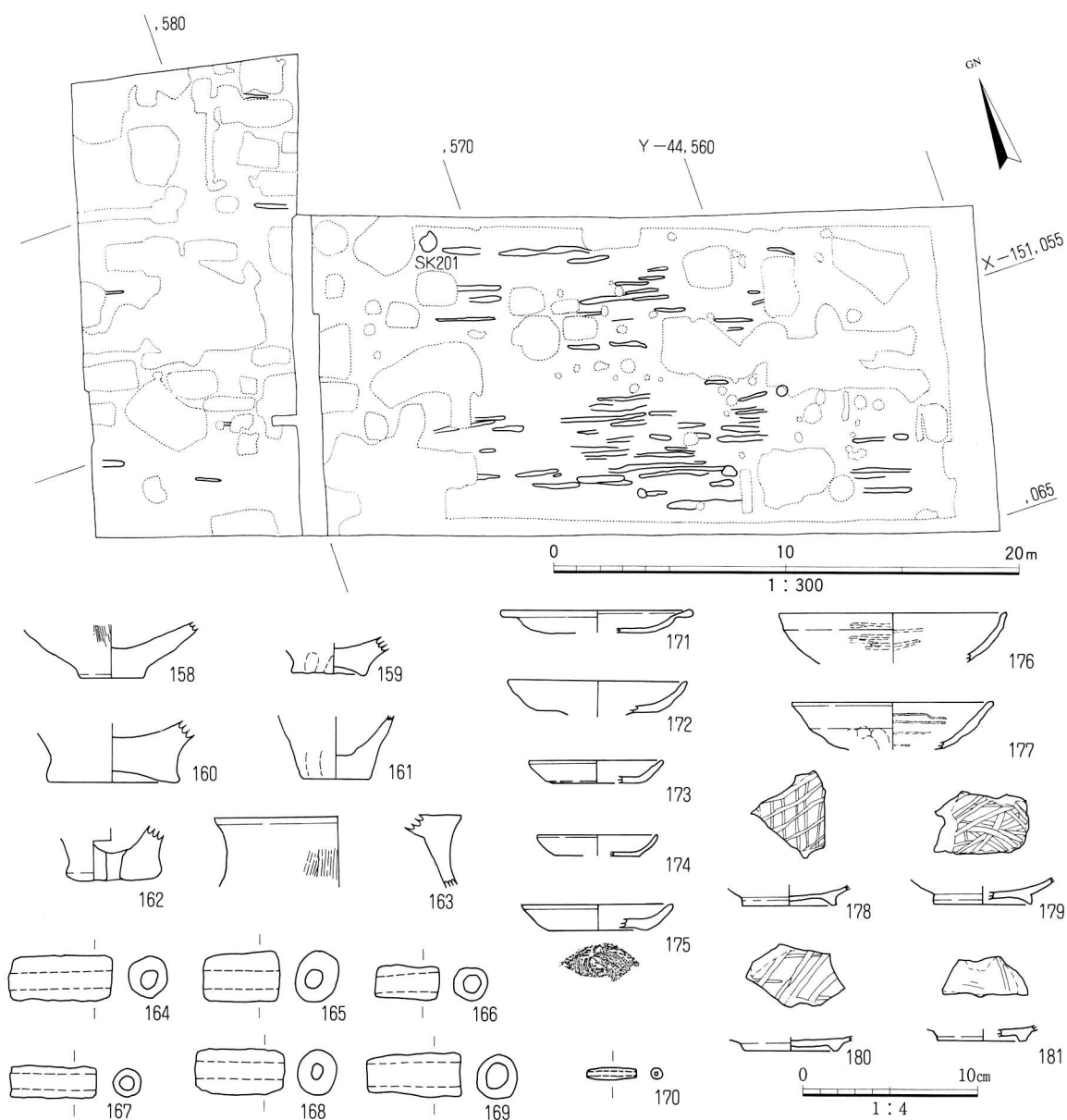


図25 第2層下面検出遺構と出土遺物

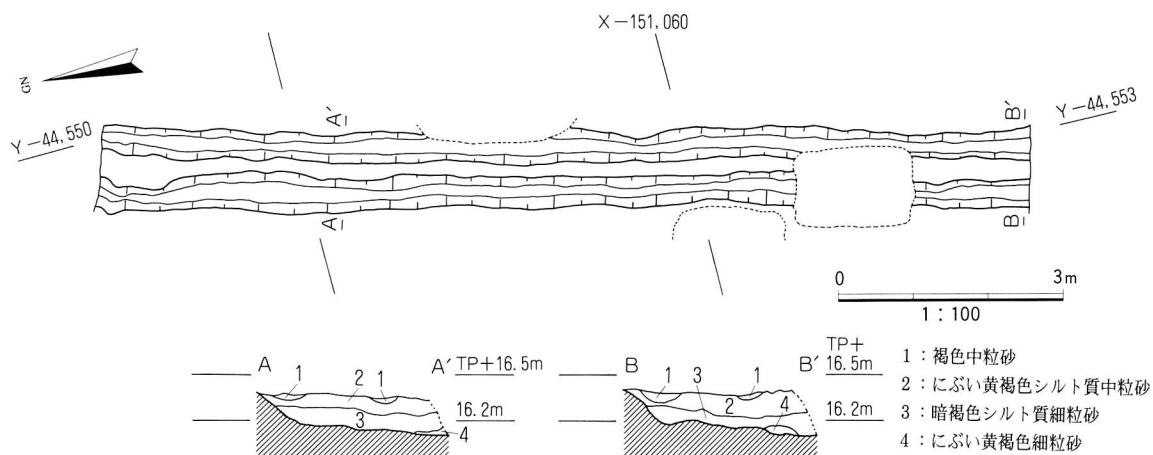


図26 SX101畝間実測図

は1.3gで、中世に属する。171～174は土師器小皿である。171は口径11.0cm、器高1.5cmで、口縁部が「て」の字状に外反する。平安時代Ⅲ期新段階に属すると思われる。175は須恵器小皿で底部に糸切り痕が残る。176～181は瓦器である。178の内面には斜格子状の暗文が施されている。これらは13世紀中頃であるが、第2層から出土した細片の中には14世紀以降に属するものも含まれている。

2) 近世の遺構

SX101(図26、図版11) 調査区の西側で検出した畝跡である。地山を南北方向に約30cm下げて、作土を敷いている。埋土は4層に区分され、2層の上面で畝間を、2層や3層基底面では鋤痕を検出した。3層から染付の破片が出土していることから、時期は近世以降と思われる。

なお、Ⅱ区の西半分では池の跡を検出した(図27、図版11)。深さ2.5mであり、埋土中より急須が出土したことから、19世紀以降に埋め戻されたと思われる。Ⅱ区の20mほど南のAS96-3次の立会調査(図5)でも同様の埋戻し土を検出しており、池はさらに南に広がるものと思われる。

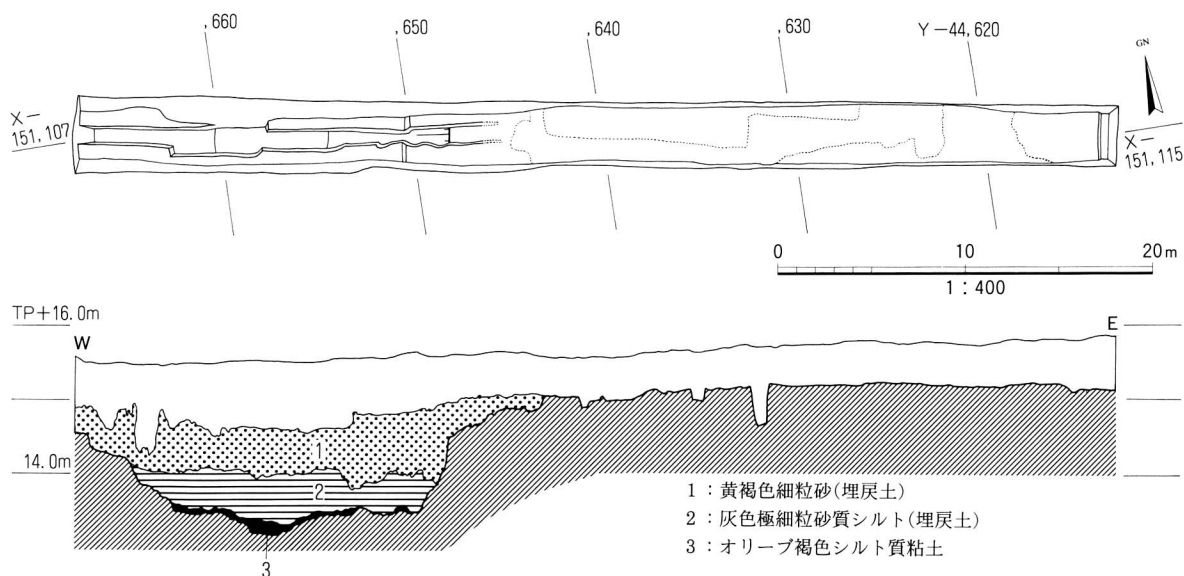


図27 Ⅱ区池実測図

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

第1節 阿倍野筋遺跡の変遷

1) 旧石器～弥生時代

今回の調査では、旧石器～弥生時代中期の遺物が出土したものの、その量は古墳時代前期のものに比べると非常に少ない。石器遺物としては旧石器時代のナイフ形石器1、縄文時代の有茎尖頭器3、石鏃4～16、石匙17があり、図示しえなかったがサヌカイトの剥片が40点あまり出土した。また、弥生土器は中期のものが20片程出土したが、畿内第Ⅳ様式に属する台形土器163以外は時期の特定が困難である。遺物量からみて当地に弥生時代中期以前に集落があった可能性は低いと思われる。

また、第3層から粗いタタキが施された甕の破片が多く出土している。これらの土器が弥生時代後期に属することも考えられるが、器種構成からみて庄内式期以降とするのが妥当であろう。

2) 古墳時代前期(図28)

阿倍野筋遺跡では4度の調査で古墳時代前期の遺構が確認されており、遺跡の南側には庄内式期Ⅱ～Ⅲの遺構が、北側には布留式期Ⅰの遺構が分布するという傾向がある。ただし、資料数が十分でないことから、現在のところ連続的な変遷は追えない。

阿倍野筋遺跡で本格的に集落が展開するのは庄内式期Ⅱ～Ⅲの段階である。AS97-8次調査地では一辺9.0mに復元される大型の竪穴住居が検出されており、この住居の屋内土壌からは水銀朱と思われる顔料が内面に付着した鉢が出土している[辻美紀1998b・1999]。また、約25m北のAS98-7次調査では桁行4間(7.2m)以上、梁行2間(5.5m)の総柱の掘立柱建物も検出されている[杉本厚典1999a]。大型の竪穴住居と掘立柱建物のいずれもが一般的な集落では見られないものである。これらはほぼ同じ方向を向いており、併存した可能性が高い点は注目される。

AS98-2次調査で検出された遺構は概ね布留式期Ⅰの段階に該当する。AS89-1次調査の竪穴住居も出土遺物が微量であるものの同じころのものと思われる。両調査区で検出された竪穴住居はいずれも東辺中央でベッド状遺構が途切れるという共通性がある。AS98-2次調査で検出された掘立柱建物4棟も正確な時期の判定は困難であるが、同じ調査区の遺構がいずれも布留式期Ⅰであることから、この時期に属するものであろう。また、いずれも10㎡前後と小型であることから、住居というよりも倉庫としての機能があったのではと思われる。

この時期の外来系遺物には西方のものが見られる。吉備系の甕27や讃岐系の甕75がそれで、第3層から出土した鉢102も吉備系の可能性がある。また、底部に木の葉の圧痕がある甕93～97や壺98は播磨や西摂津地域でよく見られるものである。一方、SX301出土の甕82や第3層出土の甕89・壺101は

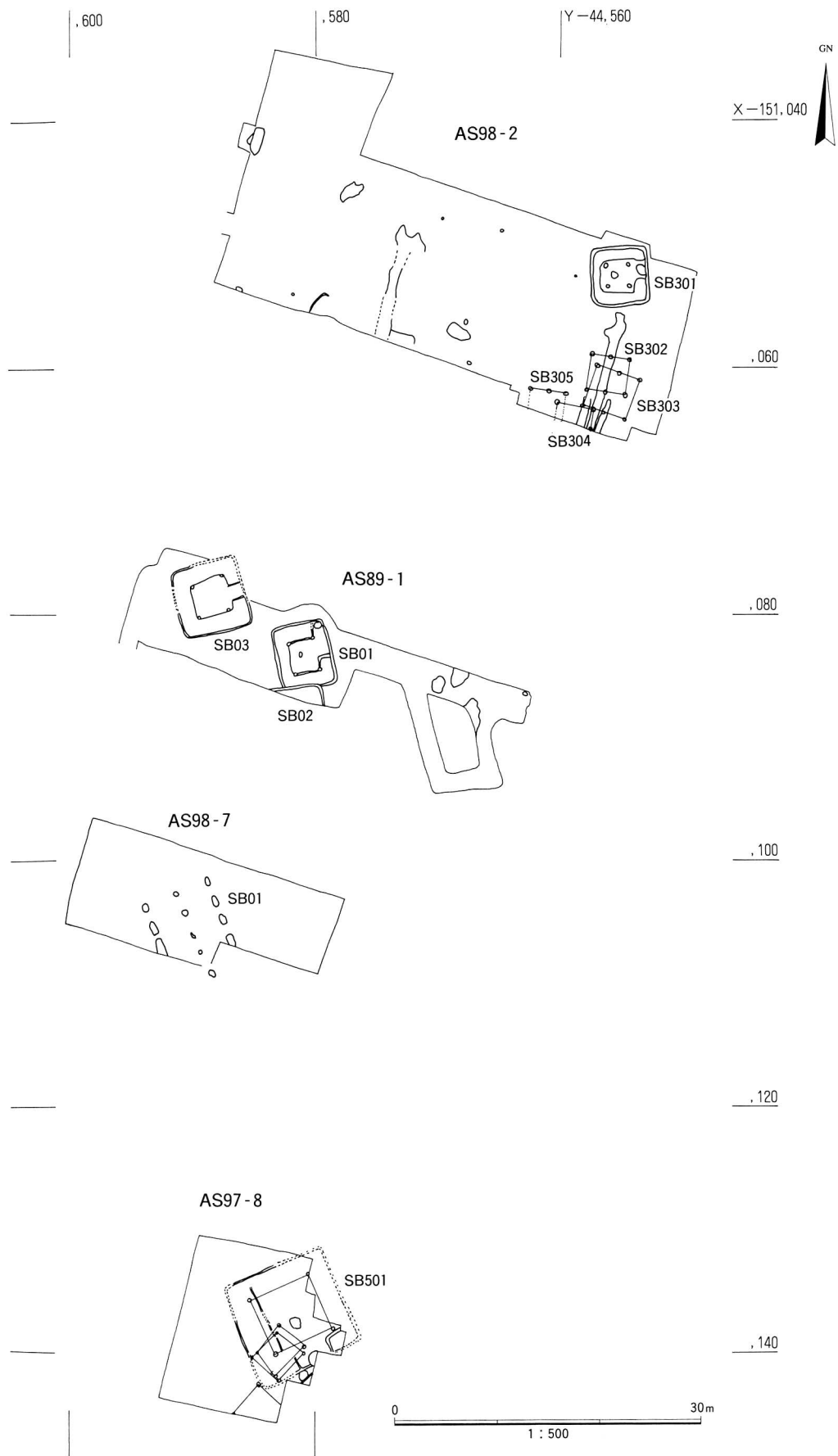


図28 阿倍野筋遺跡の古墳時代前期の遺構配置図

生駒西麓産の胎土を有するものであるが、中河内の遺跡で出土する量と比較すると全体の中で生駒西麓産の土器が含まれる割合は格段に少ない。

また、この時期の当遺跡の特色として挙げられるのは、ベッド状遺構が付設された竪穴住居の割合が高いことである。今回報告のSB301をはじめ、AS89-1次のSB01・03、AS97-8次のSB501がそれに該当する。河内湖周辺におけるベッド状遺構の例は亀井北遺跡3号住居[大阪文化財センター1986]ぐらいであるが、和泉地域では庄内式古段階から布留式古段階で多く確認されている[西村歩1996]。また、播磨や北四国のような東部瀬戸内地域や西摂津地域では弥生時代後期後葉以降にベッド状遺構が付設された住居の割合が増加する[寺井誠1995]。外来系土器に東部瀬戸内系や西摂津系のものが見られることを考え合わせると、阿倍野筋遺跡でのベッド状遺構の出現の背景にはこれらの地域の影響が考えられる。

なお、布留式期Ⅰ以後は当遺跡ではヒトとの係わりをほとんど見受けられない。おそらく集落が廃絶してから、長らく居住地になることはなかったものと思われる。それはAS98-2次の竪穴住居SB301が飛鳥時代中頃まで埋まりきらなかったことから裏付けられる。

3) 古墳時代中期以降

古墳時代中期と確認できる遺物は第1・2層の遊離資料も含めて皆無であった。古墳時代後期になると、わずかながらヒトとの係わりがあったようで、溝SD305や竪穴住居SB301の2層からTK10型式の須恵器が出土している。

7世紀中葉には調査地の北東約300mのところに阿倍寺が創建されるが、この時期の遺物として確実なのは、竪穴住居SB301の1層から出土した須恵器平瓶18のみである。これまでの調査では古代の遺構は検出されていないが、古代寺院の近辺にはそれに付随する集落がある場合が多く、今後の調査の進展で発見される可能性は十分ある。

奈良・平安時代に該当する遺物は微量であり、第2層から数点の破片が出土したのみである。第2層からは鎌倉～室町時代の瓦器や瓦質土器・土師器小皿が細片ではあるものの多く出土している。また、第2層下面では東西方向の耕作溝が多数検出されている。近世に該当する第1層も作土層であり、鎌倉時代以降は耕作地として利用されていたようである。近世になると、阿倍野周辺は綿作をはじめとする商業的農業や大根、蕪菁などの大坂市中を市場とした蔬菜生産が盛んになるとされており[直木孝次郎・森杉夫監修1986]、それを裏付けるものであろう。

第2節 管状土錘からみた操業形態の復元

今回出土した漁具には土錘、飯蛸壺、鉄製刺突具がある。この中で特筆されるのが、管状土錘の多さであり、細片も含めて総数72点にのぼる。いずれも側面形が長方形をなすものであり、両端が丸くおさまるものや紡錘形のは一点も出土していない。この種の管状土錘は[和田晴吾1982]の「c類」に該当し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて瀬戸内海から大阪湾沿岸の海浜部を中心に分布していることが指摘されている。近年では西は博多湾沿岸[福岡市教育委員会1989]、東は東京湾沿岸[谷口榮1995]でも確認されており、和田が指摘した地域を主として広範囲に分布していることがわかる。また、内水面域で出土した例も少なからずあるが、奈良市の矢部遺跡の例では表面に布圧痕が残っており、実際には使用されずに、別の意図で持ち込まれた可能性が高い[奈良県立橿原考古学研究所1986]。

大阪市内でもこのような形態の管状土錘は阿倍野筋遺跡の他に、崇禅寺遺跡、宮原遺跡(註1)、豊崎遺跡、本庄東遺跡、平野町3丁目所在遺跡、大坂城下町遺跡、森の宮遺跡、加美遺跡、遠里小野遺跡といった遺跡から出土しており、大半は庄内式期から布留式期Ⅰの限定された時期の所産である。また、遺跡の立地は加美遺跡が平野川に面する河川流域で、森の宮遺跡が河内湖東岸であることを除けば、他の遺跡はすべて大阪湾に面しており、河口部から沿岸部にかけて密に分布することが確認できる。

ここでこれらの遺跡出土の管状土錘が近隣環境で使用していたとするなら、漁獲対象や操業形態に違いが現れるという前提をもとに、遺跡ごとの管状土錘を比較検討してみようと思う。計測に使用したのは大阪湾沿岸に立地する阿倍野筋遺跡(AS97-8次の3点を含む)の51点(註2)と崇禅寺遺跡

表1 AS98-2次出土土錘一覧

番号	遺構・層位	残存状態	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)
46	SB301	1/3欠	(5.8)	1.8	0.6	(20.1)
47	SB301	ほぼ完存	6.5	2.3	0.6	(38.0)
48	SB301	完存	5.1	2.4	0.8	36.9
49	SB301	1/2欠	5.6	3.3	1.5	(33.9)
50	SB301	ほぼ完存	4.3	2.7	0.8	(32.2)
78	SK303	完存	6.7	3.8	0.9	106.9
79	SK303	完存	5.9	3.0	0.8	63.8
114	第3層	ほぼ完存	5.4	3.9	0.8	(85.6)
115	第3層	ほぼ完存	5.3	3.8	0.7	(73.1)
116	第3層	ほぼ完存	5.9	3.6	1.0	(90.2)
117	第3層	ほぼ完存	4.8	3.3	0.9	(61.0)
118	第3層	完存	4.6	3.2	0.5	(63.7)
119	第3層	ほぼ完存	4.8	3.2	0.7	(65.5)
120	第3層	完存	4.8	3.2	0.6	71.2
121	第3層	完存	4.7	3.2	0.9	57.1
122	第3層	完存	4.9	3.2	1.2	51.6
123	第3層	完存	4.3	3.1	1.0	43.6
124	第3層	完存	5.6	3.1	1.0	57.4
125	第3層	完存	5.2	2.9	1.2	54.2
126	第3層	完存	5.8	2.8	1.2	45.0
127	第3層	完存	4.9	2.9	0.7	45.4
128	第3層	ほぼ完存	(5.6)	2.8	0.45	51.0
129	第3層	完存	5.5	2.7	0.9	49.7
130	第3層	1/3欠	5.4	2.7	0.8	(39.9)
131	第3層	ほぼ完存	5.9	2.6	1.1	(36.6)
132	第3層	ほぼ完存	5.1	2.8	0.7	(48.1)
133	第3層	完存	5.9	2.7	1.3	(46.4)
134	第3層	完存	5.7	2.7	1.3	35.7
135	第3層	ほぼ完存	6.4	2.4	1.0	(36.1)
136	第3層	ほぼ完存	5.9	2.1	0.7	(33.6)
137	第3層	ほぼ完存	5.8	2.3	1.0	(26.4)
138	第3層	1/3欠	(6.7)	2.2	0.8	(24.0)
139	第3層	完存	5.8	2.4	0.7	37.1
140	第3層	1/3欠	5.4	1.9	0.5	(24.2)
141	第3層	完存	5.0	2.7	1.0	33.4
142	第3層	完存	4.9	2.5	1.1	31.1
143	第3層	完存	5.6	3.0	1.0	50.5
144	第3層	1/3欠	(4.6)	3.1	0.7	(47.9)
145	第3層	1/2欠	5.1	2.5	0.9	(31.9)
146	第3層	完存	4.1	2.6	0.9	33.0
147	第3層	完存	4.4	2.2	0.4	24.3
148	第3層	完存	3.9	2.0	0.4	23.2
149	第3層	完存	3.8	2.0	0.6	15.4
150	第3層	1/2欠	(3.0)	2.8	0.5	(26.8)
151	第3層	1/2欠	(1.7)	2.7	0.7	(15.5)
164	第2層	ほぼ完存	5.9	2.5	1.0	(35.0)
165	第2層	完存	4.4	2.9	1.0	39.9
166	第2層	ほぼ完存	3.8	2.0	0.8	(17.3)
167	第2層	ほぼ完存	5.1	1.7	0.7	(17.5)
168	第2層	1/2欠	5.2	2.1	0.9	(30.4)
169	第2層	1/2欠	4.9	2.5	1.1	(19.5)
170	第2層	ほぼ完存	3.0	0.5	0.2	1.3

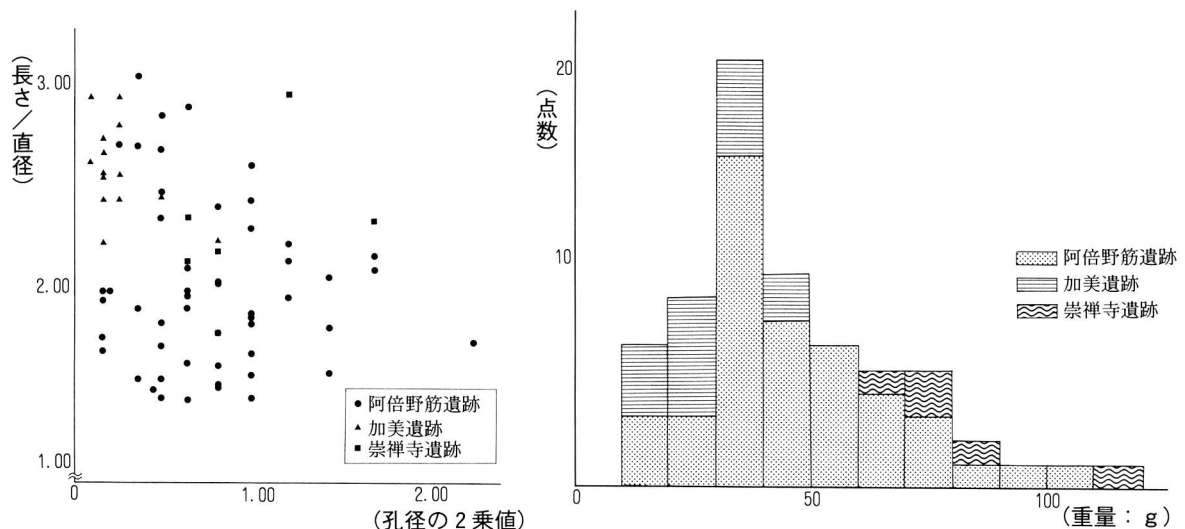


図29 管状土鍾の計測値の比較

(SZ89-6・13次)の6点、平野川流域の加美遺跡(KM84-1次)の14点である(註3)。なお、重量を測定する際には1/3以上欠損しているAS98-2次の11点は除外した。

まず、形態の比較をするには、[真鍋篤行1996]の方法に従った(註4)。図29の左側は、管状土鍾の長さを直径で除した数値(以下、[真鍋篤行1996]に倣って「P」と称する)を縦軸に、孔径の二乗値(同「L」)を横軸にとった散布図である。加美遺跡のものはLが0.25(孔径0.5cm)以下でPが2.5以上のものが多いことから、孔径が小さく比較的細長い土鍾であるということがわかる。一方、阿倍野筋遺跡や崇禅寺遺跡の土鍾は逆にLが0.25(孔径0.5cm)以上でPが2.5以下のものが多く、加美遺跡のものとほとんど重ならない。

続いて、重量の比較をしてみると(図29右)、阿倍野筋遺跡は15.4gから106.9gまでであり、30～40gにピークのある正規分布を示している。崇禅寺遺跡は68.7gから115.4gまでであり、いずれも比較的大きなものに偏っている。一方、加美遺跡の管状土鍾の重さは13.8gから47.1gの間に分布しており、比較的軽い管状土鍾が用いられていることがわかる。

この結果を[真鍋篤行1996]に適合させてみると、重量が軽い加美遺跡の管状土鍾は、孔径が小さく外形が細長いことから刺網に適したものと思われる。一方、阿倍野筋遺跡や崇禅寺遺跡の管状土鍾は、孔径が比較的大きく、外形が太く短いものが多いことから地曳網や舟曳網といった網により適したものであるといえよう。民俗例を参考にすると、刺網は河川・湖沼や海の比較的水深の浅い水域で小魚やエビを対象に使われ、曳網は沿岸域や大河川の河口域など比較的水深が深いところで、表層から底層に生息する多種多様な魚を捕獲するために用いられたものと思われる。古墳時代前期の段階では平野川流域に立地する加美遺跡と、大阪湾に面する阿倍野筋遺跡や崇禅寺遺跡で、対称的な管状土鍾が出土することは、各遺跡で近隣の環境に適合した漁業を行っていたことを反映しているであろう。

また、弥生時代後期以降に重くて孔径が大きい土鍾が増加する点については、作業の集団化を要する曳網漁の普及とともに、操業規模の大型化と操業範囲の広域化につながる事が考えられる[真鍋篤行1996、久保和士1997]。弥生時代中期以前では管状土鍾の孔径は一般的に小さく、刺網や小規模な定置網に適したものであることから、弥生時代後期以降に新たに孔径が大きい管状土鍾が出現した

ことは漁業技術の画期と評価できるであろう。河内湖の南岸に立地する西岩田遺跡[大阪文化財センター1983]や小阪合遺跡[八尾市文化財調査研究会1987]でも重くて孔径が大きい管状土錘が出土しているが、操業範囲の広域化が考えられるのであれば、遺跡付近の河内湖で操業していたというよりも、大阪湾に出漁していた可能性も十分考えられる。一方、この画期が専門的な集団の形成につながるかという点については論証が困難である。ただ、中世には漁撈活動に従事するとともに、交易にも携わっていた集団が存在したことから類推すると[網野善彦1997]、漁業とともに交易にも従事していたのではないかと想定される。それは第3節でもふれるように海浜部の集落では漁具に加え、他地域の土器も多く出土していることとも整合する。

以上のような他遺跡の状況や民俗例を参考にすると、阿倍野筋遺跡の操業形態は、集団的な曳網漁であったと推定される。Ⅰ区の第3層下面の最終的な調査面積は600㎡あまりであったが、これほど多くの管状土錘が出土したことは、当遺跡の海への依存度が高かったことを物語っている。

註)

- (1) 宮原遺跡は淀川区宮原に位置する遺跡で、崇禪寺遺跡はすぐ南側にある。1995年1月に実施された調査(MH94-2次)では、中世の掘立柱建物、井戸などの遺構が検出された[松本啓子1996]。管状土錘は中世の落込みから出土したものであるが、側面形が長方形であることから弥生時代後期から古墳時代前期のものと判断して支障はないと思われる。
- (2) 表1には第2層出土の170を挙げているが、これは中世に属するものであり、分析には用いていない。
- (3) 阿倍野筋遺跡のAS97-8次調査の資料については[辻美紀1999]で報告されている。崇禪寺遺跡の資料については[杉本厚典1999b]で一部が紹介されている。加美遺跡の資料に関しては未報告であるが、写真は[櫻井久之1986]で公表されている。
- (4) [真鍋1996]では、各数値の意味については次のように規定している。Lについては「網の強度＝網の径の2乗値」という水産学の定式があり、これは沈子網を通す孔径が沈子網の径にほぼ等しいという着想から生み出されたものである。一方、Pは土錘の外形が機能差を反映するという考えに基づく。つまり、細長い管状土錘が網に絡みにくく、太く短い土錘は平坦でない水底部に密着することに適するというので、前者が刺網に後者が袋網系の網に用いられることが多いからである。例えば、瀬戸内地方で行った民具調査によって、刺網では $1.6 \leq P \leq 4.1$ で、 $L \leq 0.25$ (孔径0.5cm)という数値が多く、舟曳網や底曳網のような曳網の土錘では $1.1 \leq P \leq 2.3$ で $L > 0.25$ が多いという結果を得ている。また、重さについては作業に敏捷性が求められる刺網では軽い土錘が、網を安定させる必要のある曳網では重い土錘が適しているものと思われる。

第3節 古墳時代前期の上町台地とその周辺

近年、上町台地とその周辺の低地部において、古墳時代前期の遺跡の増加が著しい。これらの遺跡は弥生時代中期以来継続してきたものではなく、ほとんどが弥生時代後期末頃に新たに出現したものである。ここでは弥生時代後期も含めて遺跡の動向を整理し、全国的な傾向と比較してみようと思う。

1) 遺跡の事例

東三国遺跡(東淀川区) 長柄砂洲の先端部に立地しており、1998年に初めて調査が実施された(HM98-1次)。遺構は検出されなかったものの、砂層内から布留式期ⅠからⅡにかけての古式土師器が出土した。この中には吉備系の土器も含まれている。約1km南に位置する崇禅寺遺跡で出土した古式土師器と比べてやや新しい傾向にある。

崇禅寺遺跡(東淀川区) 東三国遺跡と同じく長柄砂洲の先端近くに立地しており、大阪府教育委員会、大阪市文化財協会によってこれまで6度の発掘調査が実施されている。なかでも、大阪府教育委員会による調査では、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が多く検出された[大阪府教育委員会1982]。遺物の主体は庄内式期から布留式期Ⅰの古式土師器で、山陰・山陽・東海など他地域から搬入されたものも含まれる。また、鉄製素環頭太刀をはじめ、管状土錘や骨製刺突具といった漁具など遺跡の特徴を表すものが出土しており、鉄製素環頭太刀については一般集落から出土した例は極めて少ないことから、崇禅寺遺跡が中国大陆や朝鮮半島との外交・交易に関わる港津的機能を有していたという評価につながっている[大野薫1991]。

また、大阪市文化財協会が実施したSZ89-6次調査でも多量の古式土師器や土錘が出土しており、SZ89-13次調査では多量の古式土師器に加えて、軽石・管状土錘といった漁具、シジミ・ハマグリ・バイといった海水産の貝類やセタシジミ・タニシ科・カワニナ科などの淡水産の貝類も出土した[杉本厚典1999b・池田研1999]。

崇禅寺遺跡の対岸に位置する吹田市垂水南遺跡でも西部瀬戸内から南関東にいたる広範囲の搬入土器が確認されており、崇禅寺遺跡と同様の性格をもつ集落と考えられている[米田文孝1983]。

豊崎遺跡(北区) 長柄砂洲の西縁に位置する。TP+1.5m付近で布留式期Ⅰの古式土師器がまとまって出土した[伊藤純1990b]。ただ、工事中に出土したため、遺跡の状況については詳細不明である。

本庄東遺跡(北区) 豊崎遺跡の500m東に位置しており、1998年2月に初めて調査が実施された(HH97-1次)。地山の砂層上面で土壌が数基検出され、弥生時代後期末から庄内式期にかけての土器や管状土錘が出土した。

平野町3丁目所在遺跡(中央区) 上町台地の西縁の低地部に立地する。1988年に実施された調査(OS88-82次)で弥生時代後期末の土器や管状土錘がまとまって出土した[伊藤純1990a]。また、約50m南に位置する大坂城下町遺跡の調査(OJ98-8次)でも弥生時代後期末から庄内式期にかけての土器や銅鏃、管状土錘、飯蛸壺が出土しており、この一帯に集落が広がっていたものと思われる。

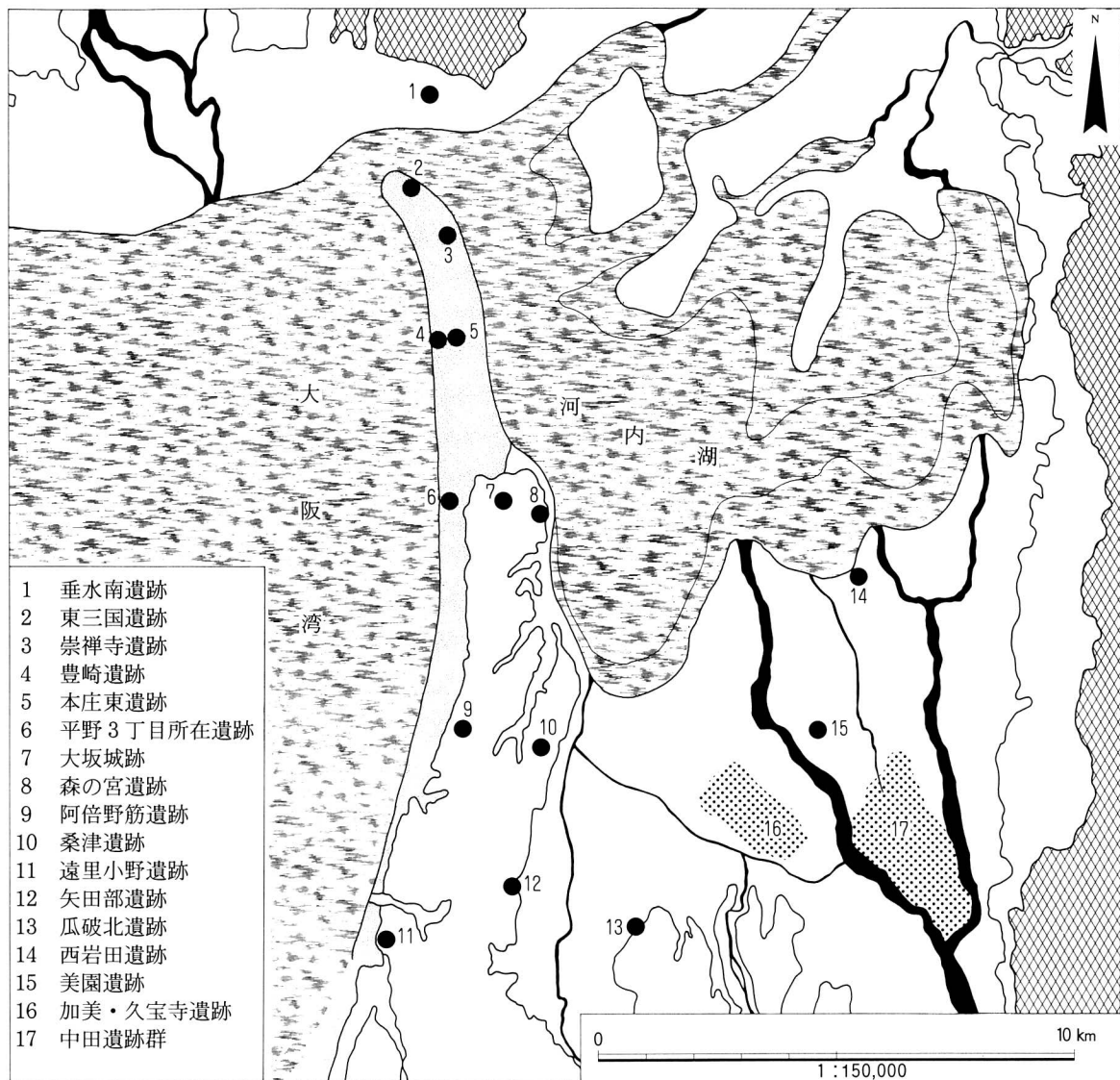


図30 上町台地と長柄砂洲上の遺跡分布図

(〔梶山・市原1986〕および〔山田1994〕をもとに作成)

大坂城跡(中央区) 上町台地のもっとも高いところに位置する。1997年に実施された中央区谷町1・2丁目の調査(OS97-1次)では、土壌から弥生時代後期から布留式期にかけての甕が数個体出土した〔平田洋司1999〕。同じ地山上面で古墳時代中期から平安時代にかけての遺構も検出されているが、埋土が異なることから、本来この時期の遺構が存在した可能性が高い。

森の宮遺跡(中央区) 上町台地の東斜面に立地する。1977年に実施された4次調査で土壌から庄内式期Ⅳの甕・高杯などの一括資料が出土した〔難波宮址顕彰会1978〕。

桑津遺跡(東住吉区) 上町台地の東側の緩斜面に立地し、弥生時代中期の拠点集落として知られている。1993年に実施されたKW93-26次調査では、直径が9～10mに復元される円形の竪穴住居が検出されて、弥生時代後期後葉の壺・甕が出土した〔松本啓子1995〕。また、KW93-26次調査地の30m西で実施されたKW98-3次調査では、溝の埋土から後期前葉の壺や甕が出土した。上記の2地点は弥生中期の集落の中心から見て、縁辺部に位置しており、基本的には弥生時代後期には衰退して

いたと考えられている。

遠里小野遺跡(住吉区) 戦前の採集資料や発掘調査報告によって、竹管文が施された二重口縁壺や縦断面が長方形の管状土鍾が紹介されているが、詳細な状況は不明である[前田長三郎1933、藤岡謙二郎1942]。また、西側に隣接する山之内遺跡では弥生時代後期の甕が出土しているが、その量は非常に少ない[大阪市文化財協会1998c]。

矢田部遺跡(東住吉区) 上町台地の東斜面に立地する。方形周溝墓の可能性のある溝から庄内式期Ⅳに属する二重口縁壺や生駒西麓産の庄内甕の細片が出土した[久保和士1998b]。また、1.2km東の照ヶ丘矢田遺跡では後期後葉の土器棺墓が検出されている[古市晃・杉本厚典1997]。

以上のように見てみると、大阪湾に面する遺跡の増加が著しく、特に長柄砂洲上の遺跡の増加が顕著である。これは第2節でふれた管状土鍾の出土する遺跡とも共通する。また、これらの遺跡は[積山洋1994]でもふれられているように、須恵器の出現する頃には断絶する。なお、弥生時代中期の拠点集落に位置づけられる森の宮遺跡や桑津遺跡、山之内遺跡でも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が出土しているが、その量は前代と比べるときわめて少ない。これについては集落自体が縮小したか、もしくは前段階とは連続性がなく、無関係に現れたものと思われる。

2) 海岸部における集落出現の背景

海岸部で集落が急速に増加し、そこでは非在地系の土器が見られるといった現象は上町台地周辺だけではなく、日本列島各地で見られる。上町台地の南東に位置する中河内では弥生時代前期以来継続してきた拠点集落が弥生時代後期末までに廃絶し、庄内式期から布留式期にかけて加美・久宝寺遺跡や中田遺跡群のように旧大和川流域で密集して現れる[山田隆一1994]。これらの遺跡では各地の搬入土器およびその影響を強く受けた土器が出土しているほか、加美遺跡や久宝寺遺跡のように朝鮮半島系の土器も確認されている。このような現象の背景には、中河内が旧大和川を通じての大和への入り口であり、それ故に各地の物資が集中したためであると想定されている。このように爆発的に拡大した旧大和川流域の遺跡ではあるが、布留式期の新しい段階には断絶している。

また、北部九州の博多湾沿岸では庄内式併行期になると畿内系土器をはじめとする非在地系遺物が現れる。例えば、博多湾沿岸に立地する福岡市早良区の西新町遺跡では弥生時代後期末から集落が急速に拡大しはじめ、庄内式～布留式併行期には畿内系、山陰系が出土しているのに加え、陶質土器や竈を備えた竪穴住居といった朝鮮半島の強い影響が見られるのである[福岡市教育委員会1982・1989・1994、福岡県教育委員会1985]。博多区の博多遺跡でも畿内系に加え、山陰系、東海系といった非在地系土器が大量に出土している[吉留秀敏1993]。このように非常に拡大した遺跡も古墳時代中期には衰退している。

有明海沿岸でも庄内式併行期である惣座式の段階になると、海岸近くの低地部で集落が拡大し始める[蒲原宏行1994]。特に、筑後川下流域の佐賀県諸富町の遺跡群は爆発的に拡大し、畿内系土器に加え、山陰系、吉備系、東海系、関東系といった非在地系土器が出土している。また、兵庫県姫路市の長越遺跡[兵庫県教育委員会1978]や松山市の宮前川下流域に分布する遺跡群[愛媛県埋蔵文化財調

査センター1986・1998]でも庄内式併行期に急激に集落が拡大し、畿内系をはじめとする非在地系土器が多量に出土しているのである。

以上のように各地の海岸部に近い遺跡はいずれもほぼ同じ時期に現れ、須恵器が出現する頃には衰退している。これは局地的な現象というよりも日本列島全体で連動したものであり、海を介した新たなネットワークの形成が考えられるのである。実際、海岸部の集落遺跡で非在地系の土器が多く出土するということからみても、非常に広域な交流が行われているのは確かである。この背景としては航海技術の向上が当然想定されるが、久宝寺遺跡で出土しているような準構造船の存在や、操業範囲が広域化する曳網漁の発達とも整合する。

古墳時代前期は、墓制や集落構造などに大きな変化が現れることから、畿内を中心とした国家形成過程の初段階と評価されている[都出比呂志1991]。上記のような新たなネットワークの形成の背後には、各地域での湾港的な機能をもった集落の出現とともに、畿内を中心とした物流の確立が考えられる。これについては、福岡市の西新町遺跡のように畿内の影響を強く受ける時期に朝鮮半島の文物が多量に流入していることや、それ以外の地域でも大陸系の文物が現れていることから裏付けることができる。

このような検討を通じて見てみると、上町台地とその周辺の遺跡の消長は上記のネットワークと無関係ではなかろう。この地域の古墳時代前期の動向は最近ようやく明らかになってきた。これら海岸部の集落の消長についての具体的な要因は、遺跡個々の検討だけでなく日本列島全体を含めた検討によって、さらに明らかになってくるであろう。

第4節 まとめ

阿倍野筋遺跡は古墳時代前期を中心とした複合遺跡である。これまで調査がほとんどなかったことから不明確であったが、近年の調査の進展によって明らかになった点も多々ある。

遺構の変遷については庄内式期のものが遺跡の南側に、布留式期Ⅰのものが北側に分布する傾向にある。庄内式期Ⅱ～Ⅲの段階には総柱の掘立柱建物や大型の竪穴住居といった、一般集落にはない特殊な構造物が現れる。階層分化の進展や祭祀形態の変化が見られる時期でもあることから、これらの遺構の機能についてさらなる検討が必要となる。一方、布留式期Ⅰの段階では竪穴住居4棟と小規模な掘立柱建物が4棟確認されている。この時期の竪穴住居はいずれも一辺5m前後と標準的な大きさで、ベッド状遺構が伴う割合が高いのが特徴である。

多量の管状土錘や飯蛸壺、鉄製刺突具といった漁具が出土したことは、当遺跡が海への依存度の高かったことを反映している。これは今までの調査では得られなかった見解であるが、当時の環境とも整合するものであり興味深い。また、管状土錘に孔径が大きなものが含まれることは、曳網漁の発達と結びつくものと想定されており、大阪湾における漁業の画期として位置づけられよう。

集落の存続時期は庄内式期から布留式期Ⅰまでと限られており、古墳時代中期には継続しない。これは当遺跡だけでなく、上町台地とその周辺の遺跡、さらには他地域の海岸部に位置する集落の消長とも一致する。第3節でもふれたように、これらの現象の背後にはこの時期特有のネットワークの形成が考えられる。

阿倍野筋遺跡は、これまで調査された総面積が1,500m²程度であり、遺跡全体からするとほんの一部に過ぎないと思われる。試掘立会で明らかになっているように、古墳時代前期の遺構が阿倍野筋の東側に広がるのは確実である。今後の調査の進展によって、集落構造の変遷や墓域の有無などさまざまな点が明らかになっていくことが期待される。

引用・参考文献

- 網野善彦1997、「総説－摂河泉の海と中世社会－」：大阪府漁業史編さん協議会編『大阪府漁業史』、pp.74-80
- 池田研1999(印刷中)、「古墳時代の貝出土遺跡－崇禅寺遺跡を中心に－」：『大阪市文化財協会研究紀要』2
- 伊藤純1990a、「新発見の遺跡－中央区平野町3丁目の調査－」：大阪市文化財協会編『葦火』24号、p.5
- 1990b、「豊崎神社境内出土の土器」：大阪市文化財協会編『葦火』26号、pp.4-5
- 上田宏範1988、「阿倍野古墳群」：新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻、pp.368-374
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター1986、『宮前川遺跡』埋蔵文化財調査報告書第18集
- 1998、『斎院・古寺』埋蔵文化財調査報告書第67集
- 大阪市文化財協会1980、『瓜破北遺跡』
- 1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、p.314
- 1996、『四天王寺境内遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1998a、『桑津遺跡発掘調査報告』
- 1998b、『南住吉遺跡発掘調査報告』
- 1998c、『山之内遺跡発掘調査報告』
- 1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 大阪府教育委員会1982、『崇禅寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
- 大阪文化財センター1983、『西岩田』
- 1986、『亀井北(その1)』
- 大野薫1991、「大阪市東淀川区崇禅寺遺跡出土の鉄製素環頭太刀」：『大阪の歴史』34 大阪市史編纂所、pp.1-10
- 荻田昭次・堀田啓一1967、「大阪市浪速区敷津町出土の遺物」：『古代学研究』第48号 古代学研究会、pp.13-14
- 梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』 青木書店
- 蒲原宏行1994、「古墳時代初頭前後の佐賀平野－集落の変貌とその画期－」：『日本と世界の考古学－現代考古学の展開－』
- 岩崎卓也先生退官記念論文集、pp.170-185
- 京嶋覚1992、「SE01出土の土器」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.22-29
- 久保和士1996、「堀井邸建設工事に伴う発掘調査(SM94-4)略報」：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.127-137
- 1997、「考古資料からみた水産食料と漁業」：大阪府漁業史編さん協議会編『大阪府漁業史』、pp.898-909
- 1998a、「難波元町計画による建設工事に伴う発掘調査(NK96-1)略報」：『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.91-101
- 1998b、「矢田部遺跡調査報告」：大阪市文化財協会編『南住吉遺跡発掘調査報告』、pp.95-102
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』
- 櫻井久之1986、「加美遺跡」：埋蔵文化財研究会編『海の生産用具－弥生時代から平安時代まで－』資料集3、pp.147-149
- 1994、「上町台地西辺出土の石製容器」：大阪市文化財協会編『葦火』52号、pp.2-3
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 佐藤隆・前田勝巳1990、「ベッド?をもつ竪穴住居－阿倍野筋遺跡－」：大阪市文化財協会編『葦火』24号、pp.6-7
- 1991、「大末建設による建設工事に伴う阿倍野筋遺跡発掘調査(AS89-1)略報」：『平成元年度大阪市

- 内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.241-248
- 佐原眞1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 菅榮太郎1995、「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.367-388
- 杉本厚典1999a、「阿倍野筋遺跡で見つかった大型掘立柱建物跡」：大阪市文化財協会編『葦火』78号、pp.4-5
- 1999b(印刷中)、「崇禅寺遺跡の古墳時代初頭の土器様式」：『大阪市文化財協会研究紀要』2
- 積山洋1994、「上町台地の北と南―難波地域における古墳時代の集落の変遷―」：『大阪市文化財論集』、pp.173-191
- 1996、「東住吉区山坂で見つかった古墳時代の集落跡」：大阪市文化財協会編『葦火』62号、p.8
- 高橋護1991、「土師器の編年 中国・四国」：『古墳時代の研究』6 雄山閣出版、pp.47-58
- 田辺昭三1966、『陶器古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 谷口榮1995、「東京湾北部における漁撈活動」：『王朝の考古学』 大川清博士古稀記念会、pp.89-107
- 樽野博幸1979、「大阪のゾウ化石とそのうつりかわり」：大阪市立自然史博物館編『大阪の化石』、pp.22-28
- 辻美紀1998a、「近畿財務局による建設工事に伴う発掘調査(AS96-7)略報」：『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.103-110
- 1998b、「大型竪穴住居と朱入り土器―阿倍野筋遺跡の最近の調査から―」：大阪市文化財協会編『葦火』73号、pp.4-5
- 1999、「阿倍野筋遺跡の発掘調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告―1997年度―』、pp.55-60
- 都出比呂志1991、「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」：『日本史研究』第343号 日本史研究会、pp.5-39
- 寺井誠1995、「古墳出現前後の竪穴住居の形態変化―漸移性と画期―」：埋蔵文化財研究会編『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ―』、pp.269-293
- 直木孝次郎・森杉夫監修1986、『大阪府の地名』日本歴史地名体系第28巻 平凡社、pp.691-694
- 難波宮址顕彰会1978、『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』
- 奈良県立橿原考古学研究所1986、『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊、p.261
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城京発掘調査報告』Ⅶ
- 西村歩1996、「屋内高床部を付設した竪穴住居―和泉地域の調査例より―」：『大阪府下埋蔵文化財研究会(第34回)資料』、pp.67-76
- 兵庫県教育委員会1978、『播磨・長越遺跡』兵庫県文化財調査報告書第12冊
- 平田洋司1996、「調査地周辺の歴史的変遷」：大阪市文化財協会編『森の宮遺跡』Ⅱ、pp.224-230
- 1998、「岡本邸建設工事に伴う発掘調査(SM96-5)略報」：『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.121-130
- 1999、「平安時代以前の遺構と遺物」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅳ、pp.18-43
- 広瀬和雄1994、「大阪府」：近藤義郎編『日本土器製塩研究』 青木書店、pp.450-489
- 福岡県教育委員会1985、『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集
- 福岡市教育委員会1982、『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集
- 1989、『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集
- 1994、『西新町遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集

- 藤岡謙二郎1942、「大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡」：『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』12、pp.67-80
- 古市晃・杉本厚典1997、「照ヶ丘矢田遺跡でみつかった弥生時代の大型壺」：大阪市文化財協会編『葦火』71号、p.8
- 前田長三郎1933、「遠里小野石器時代遺跡に就て」：『考古学雑誌』第20巻9号 日本考古学会、p.52
- 前田豊邦1988、「市域の縄文遺跡」：新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻、pp.233-240
- 前田昇1988、「上町台地と河内低地」：新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻、pp.6-15
- 松尾信裕1997、「河内の海の西と南—大阪市内の縄文時代前半の土器—」：『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会、pp.45-57
- 松尾信裕・積山洋1996、「河内湾の岸边から—天王寺区宰相山遺跡出土の縄文土器—」：大阪市文化財協会編『葦火』63号、pp.4-5
- 松本啓子1995、「井須邸新築工事に伴う桑津遺跡発掘調査(KW93-26)略報」：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.75-84
- 1996、「新大阪森ビル建築に伴う発掘調査(MH94-2)略報」：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.153-165
- 松本百合子1991、「はじめまして勝山遺跡です」：大阪市文化財協会編『葦火』31号、pp.6-7
- 真鍋篤行1996、「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」：『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』IX、pp.55-163
- 宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I、pp.93-119
- 森浩一1958、「大阪市西成区南海通出土の縄文土器」：『古代学研究』第18号 古代学研究会、pp.30-32
- 森島康雄1992、「畿内瓦器碗の併行関係と暦年代」：大和古中近研究会編『大和の中世土器』II、pp.113-127
- 八尾市文化財調査研究会1987、『小阪合遺跡』八尾市文化財調査研究会報告11
- 山田隆一1994、「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に関する遺跡群の枠組みについて—」：『弥生文化博物館研究報告』第3集、pp.119-146
- 吉留秀敏1993、「弥生時代から古墳時代の博多」：『法哈噠』第2号、pp.91-105
- 米田敏幸1991、「土師器の編年 近畿」：『古墳時代の研究』6 雄山閣出版、pp.19-47
- 米田文孝1983、「搬入された古式土師器—摂津・垂水南遺跡を中心として—」：『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念 考古学論叢』、pp.865-917
- 和田晴吾1982、「弥生・古墳時代の漁具」：『考古学論考』小林行雄博士古希記念論集 平凡社、pp.305-339

あ　と　が　き

本書は阿倍野筋遺跡についての初めての報告書で、多くの方々にとっては未知の遺跡であったと思われる。本書では今回の調査結果に加え、これまで行われた小規模な調査、試掘立会も含めて総合的に検討した。その結果、古墳時代前期のごく限られた時期に登場する、海に依存した集落遺跡であることがようやく見えてきた。全国的に見ても、古墳時代前期に海岸部に忽然と遺跡が現れるが、当遺跡もその動向と連動したものであるのに違いない。

遺跡の性格がわかるように編集したつもりではあるが、発掘調査後の約5ヵ月で遺物整理と報告書作成を仕上げなければならなかったため、不十分な点は多々あると思われる。大方の忌憚なきご批判を乞うとともに、本書の活用によって、当遺跡を含めた古墳時代前期の上町台地の動向が全国的な議論の俎上にのることを願ってやまない。

(永島暉臣慎)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- ト TK10型式 …… 16, 17, 22, 31
- あ 飛鳥Ⅲ …… 16, 17
- い 飯蛸壺 …… 19, 21, 26, 32, 35, 39
生駒西麓産 …… 21, 24, 31, 37
石匙 …… 10, 13, 29
石庖丁 …… 24, 29
- お 屋内土壇 …… 8, 15～17, 19, 29
- か 瓦器 …… 6, 10, 27, 28, 31
瓦質土器 …… 10, 27, 31
管状土錘 …… 19, 23, 26, 27, 32
～35, 37, 39
- き 畿内第Ⅳ様式 …… 5, 29
吉備系 …… 17, 19, 24, 29, 35, 37
脚台Ⅲ式 …… 26
- け 結晶片岩 …… 17, 24, 29
- こ 耕作溝 …… 10, 27, 31
高山寺式 …… 5
小型器台 …… 7, 19
小型丸底土器 …… 7, 16, 19
甗 …… 27
- さ サヌカイト …… 4, 10, 29
讃岐系 …… 23, 29
山陰系 …… 17, 24, 37
- し 庄内式期 …… 3, 7, 8, 29, 32, 35,
37, 39
- す 須恵器 …… 3, 5, 6, 10, 16, 17,
21, 22, 25, 28, 31, 37,
38
- せ 製塩土器 …… 17, 26
石鏃 …… 10, 13, 29
- た 台形土器 …… 27, 29
高杯 …… 19, 21, 23, 25, 36
敲石 …… 20
堅穴住居 …… 5, 7～10, 15, 16, 22,
29, 31, 36, 37, 39
玉 …… 16, 20
- て 低脚高杯 …… 7, 25
鉄製刺突具 …… 26, 32, 39
- と 砥石 …… 7, 20, 21
東海系 …… 37
- な ナイフ形石器 …… 4, 10, 29
- に 二重口縁壺 …… 17, 23, 37
- は 畠 …… 10, 28
- ひ 平瓦 …… 6, 10, 25
- ふ 布留式期 …… 7, 16, 29, 31, 32,
35～37, 39
- へ 平瓶 …… 16, 17, 31
壁溝 …… 16, 22
ベッド状遺構 …… 7, 16, 29, 31, 39
- ほ 掘立柱建物 …… 6, 8～10, 15, 20,
21, 23, 29, 34, 39
- や 弥生土器 …… 3, 10, 19, 21, 24,
27, 29
- ゆ 有茎尖頭器 …… 10, 13, 29
- ろ 炉 …… 15, 16

〈地名・遺跡名など〉

- あ 阿倍寺 …………… 6, 25, 31
阿倍野王子 …………… 6
- う 上町台地 …………… 3～5, 35～39
瓜破遺跡 …………… 17
瓜破北遺跡 …………… 26
- お 大坂城跡 …………… 36
大坂城下町遺跡 ……… 3, 32, 35
大阪湾 …………… 3, 32～34, 37, 39
御勝山古墳 …………… 5
遠里小野遺跡 ……… 6, 32, 37
- か 河内潟 …………… 5
河内湖 …………… 3, 5, 31, 32, 34
勝山遺跡 …………… 4, 5
加美遺跡 …………… 32～34, 37
亀井北遺跡 …………… 31
- き 岸ノ里遺跡 …………… 5
久宝寺遺跡 …………… 37, 38
- く 熊野街道 …………… 6, 7
桑津遺跡 …………… 4～6, 36, 37
- こ 小阪合遺跡 …………… 34
- さ 細工谷遺跡 …………… 6
宰相山遺跡 …………… 4, 5
- し 敷津遺跡 …………… 3
四天王寺 …………… 6
聖天山古墳 …………… 5
- す 住吉大社 …………… 6
- そ 崇禪寺遺跡 …………… 5, 26, 32～35
- た 玉出遺跡 …………… 3
垂水南遺跡 …………… 35
- て 天王寺公園遺跡 ……… 5
帝塚山古墳 …………… 5
照ヶ丘矢田遺跡 ……… 37
- と 豊崎遺跡 …………… 32, 35
- な 長越遺跡 …………… 37
中田遺跡群 …………… 37
長原遺跡 …………… 13
長柄砂洲 …………… 5, 35, 37
浪速元町遺跡 ……… 3
難波貝層遺跡 ……… 3
難波砂堆 …………… 3
難波宮 …………… 6
- に 西岩田遺跡 …………… 34
西新町遺跡 …………… 37, 38
- は 博多遺跡 …………… 37
- ひ 東三国遺跡 …………… 35
平野町3丁目所在遺跡
…………… 3, 5, 32, 35
- ほ 本庄東遺跡 …………… 32, 35
- ま 丸山古墳 …………… 5, 6
- み 南住吉遺跡 …………… 5, 6
宮原遺跡 …………… 32, 34
- も 森の宮遺跡 …………… 4, 5, 32, 36, 37
- や 矢田部遺跡 …………… 37
矢部遺跡 …………… 32
山坂遺跡 …………… 6
大和川今池遺跡 ……… 5
山之内遺跡 …………… 4～6, 37

**Archaeological Report
of
Abenosuji Site in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Reconstruction of
Minami Funeral Hall

March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The Following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB:Pit-Dwelling and Building

SD:Ditch

SK:Pit

SP:Pit and Posthole

SX:Other feature

CONTENTS

Forword	
Explanatory notes	
Chapter I Background of reserch	1
Chapter II Site Location and Historical Setttng	3
S.1 Site Location and Geographical Setting	3
S.2 Historical Setting around the site	4
S.3 Current investigation of Abenosuji Site	7
Chapter III Reserch of Present Reserch	9
S.1 Outline of reserch	9
S.2 Stratigraphy and artifacts	10
1) Stratigraphy	10
2) Stone artifacts	10
S.3 Features and artifacts of the Kofun Period	15
1) Pit-Dwelling	15
2) Buildings	20
3) Ditches	21
4) Pits	22
5) Others features	23
6) Artifacts from stratum 3	24
S.4 Features and Artifacts of the Medievel and Pre-Modern Period	27
1) Features and Artifacts of the Medievel Period	27
2) Features of the Pre-Modern Period	28
Chapter IV Discussion of features and artifacts	29
S.1 Changes of the Abenosuji Site	29
1) From Paraeolithic to the Yayoi Period	29
2) the Early Kofun Period	29
3) After the Middle Kofun Period	31
S.2 Reconstruction of fishing system from analysis of clay net weights	32
S.3 Uemachi Terrace and the surrounding area in the Early Kofun Period	35
1) Investigation of each site	35
2) Historical background of settlement emergence in the coastal area	37
S.4 Conclusion	39
Referance	40
Postscript	
Index	
English Contents and Summary	

ENGLISH SUMMARY

In this volume we report the results of excavation undertaken at the Abenosuji Site between May and September of 1998. The site is located on the top of the Uemachi Terrace in Abeno Ward, Osaka City. This excavation was prior to the reconstruction of Minami Funeral Hall and totaled 826 square meters. Previous investigation of the site has revealed the features, such as pit-dwellings and postholes, indicative of the Early Kofun Period residential area.

In this excavation, remains of portion of the Early Kofun Period settlement were uncovered along with evidences of cultivation during the Medieval and Pre-Modern Period. On the lower margin of Stratum 3, the remains of an Early Kofun Period pit-dwelling and postholes of some other structures as well as ditches and pits were detected. The pit-dwelling is roughly square in shape with four interior postholes and a low step outside the postholes. The latter feature of the step is characteristic of style in Harima and Western Settsu area.

Potteries of the Early Kofun Period were found at the site, including one which has characteristics similar to pottery from Kibi and Northern Shikoku area. Many fishing tools, such as the clay weights of fishing nets and octopus traps made of perforated jars, and salt-making pots were also found. These artifacts likely represent a lifeway focused on maritime activities. To reinforce this argument there is geological evidence to suggest a higher sea level such that the site would have been located approximately 1km east of the coast.

The result of this excavation have complimented those of other investigations, adding to body of information concerning social change during the Early Kofun Period. On the Uemachi Terrace and along the lower western and northern areas of the terrace, there are several other sites dated to the Early Kofun Period such as the Sozenji Site. Most of these sites appeared in the end of the Late Yayoi Period or the beginning of the Early Kofun Period, but not as far back as the Middle Yayoi Period. Similar shifts to a coastal adaptation occurred in other areas such as in Central Kawachi and Northern Kyushu. Such change appears to have corresponded with the emergence of the Abenosuji Site.

In summary, the Early Kofun component at the Abenosuji appears to be representative of broader changes in social and economic organization in the Early Kofun Period of western Japan. The emergence of coastal settlement and a maritime economy are indicative of shifts seen elsewhere locally and throughout western Japan. The evidence of non-local pottery styles may indicate some increase in mobility or extra-regional interaction over that seen previously in the Late Yayoi. Though this report is only a cursory examination of this evidence, there are tantalizing clues which warrant future research and investigation.

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あべのすじいせきはつくつちようさほうこく						
書 名	阿倍野筋遺跡発掘調査報告						
副 書 名	南斎場再建整備に伴う発掘調査報告書						
巻 次							
シ リ ー ズ 名							
シ リ ー ズ 番 号							
編 著 者 名	寺井誠・宮本康治・Robert Condon・Matthew W. Van Pelt・田中清美・永島暉臣愼						
編 集 機 関	財団法人 大阪市文化財協会						
所 在 地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833						
発 行 年 月 日	西暦 1999年 3 月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あべのすじ 阿倍野筋遺跡	おおさかし あべのく 大阪市阿倍野区 あべのすじ 阿倍野筋 4 丁目	27126	34° 38′ 14″	135° 30′ 48″	AS98-2次 19980513～19980909	826m ²	南斎場再建整備 事業に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
阿倍野筋遺跡		旧石器時代			ナイフ型石器		
		縄文時代			有茎尖頭器・石鏃・石匙		
		弥生時代			弥生土器		
	集落	古墳時代前期	堅穴住居・掘立柱建物 土壇・溝		古式土師器・管状土鍾・飯蛸壺・製塩 土器・鉄製刺突具・玉・砥石・敲石		
		古墳時代後期	溝		須恵器		
		飛鳥時代			須恵器		
	畠	平安～室町時代	耕作溝		土師器・瓦器・瓦質土器・管状土鍾		
	畠・集落	江戸時代	畝・池		陶磁器		

原 色 図 版



SB301遺物出土状況(東から)



SB301出土遺物

図 版



I 区西壁地層断面



I 区南壁地層断面



SB301検出状況(西から)



SB301柱穴および床面遺物検出状況(西から)



SB301完掘状況



SB301と掘立柱建物



壺(23)出土状況



甕(27)出土状況



小型丸底土器(29)
出土状況

鉢(37~40)出土状況



小型丸底土器(32)
出土状況



壺(25)出土状況





柱穴検出状況



SB302完掘状況



SB303完掘状況

SB304完掘状況



SB305完掘状況

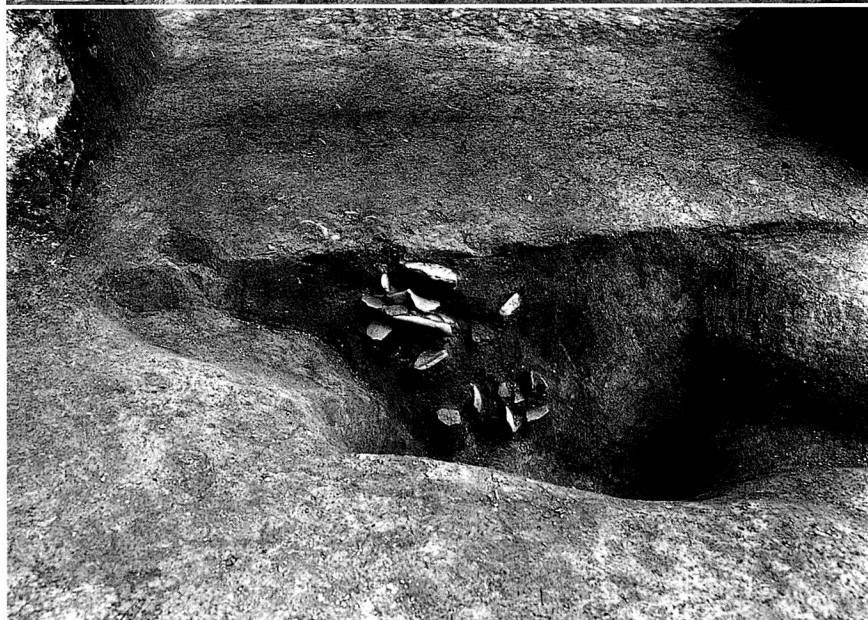


SB303柱穴断面





SD305完掘状況



SK303断面



SK303完掘状況

SK305検出状況



SK305完掘状況



SK304・305完掘状況





SX301



SX301(上の破片を取り上げた後)



鉄製刺突具(157)
出土状況

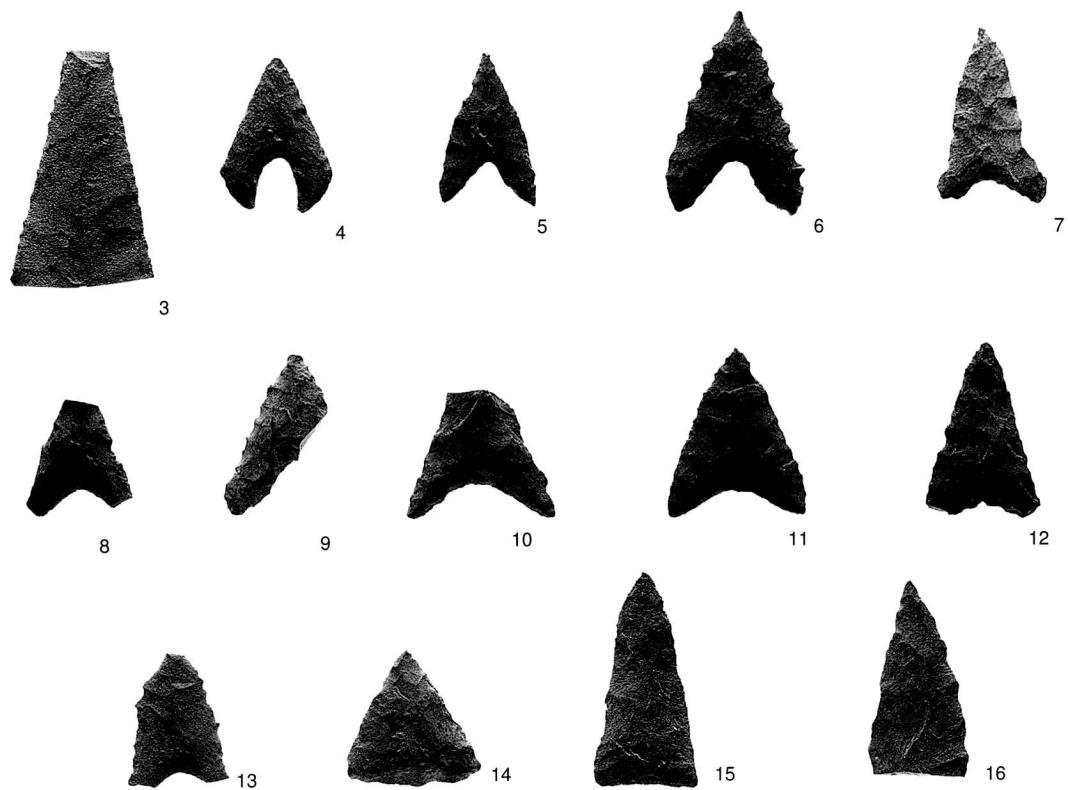
SX101畝間完掘状況



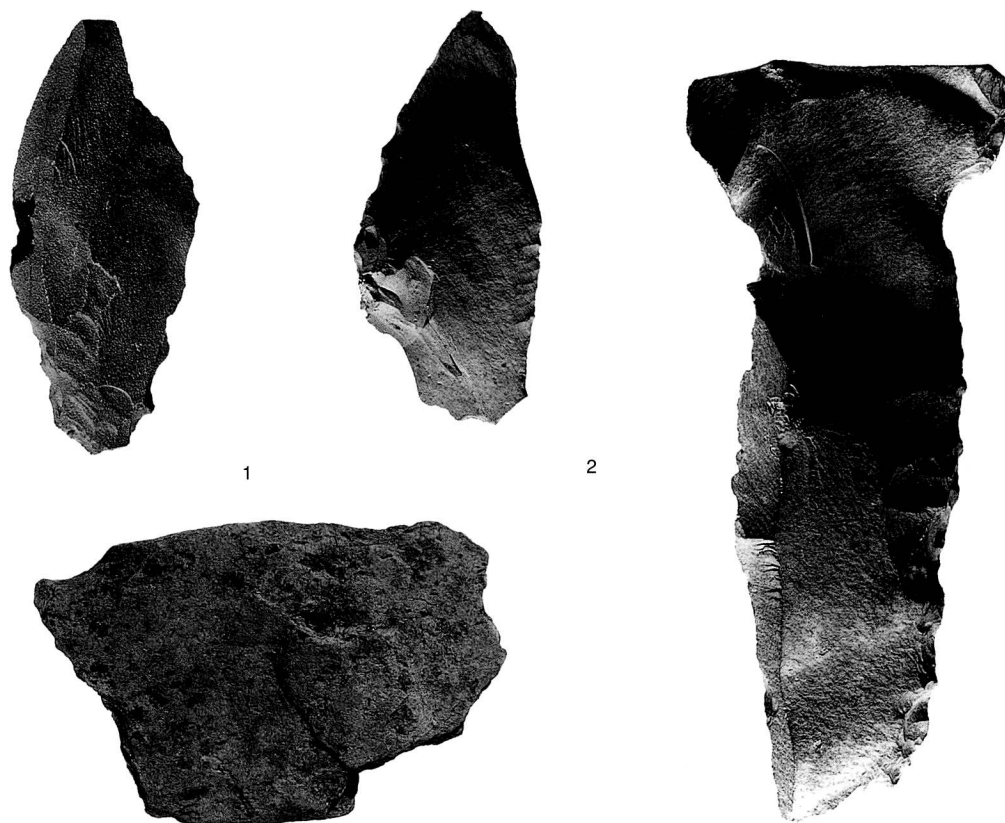
図版一 近世の遺構



Ⅱ区完掘状況



有茎尖頭器(3)および石鏃(4～16)



ナイフ形石器(1)、細部調整のある剥片(2)、石匙(17)、結晶片岩(113)



22



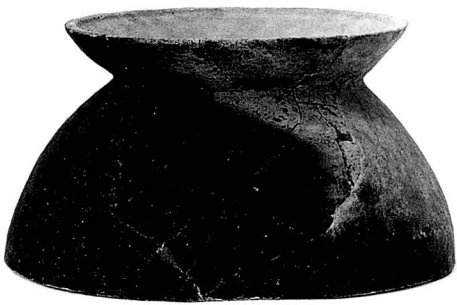
23



25



27



28



35



33



36

SB301



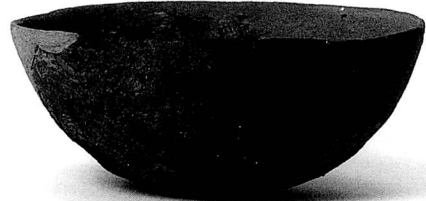
29



37



31



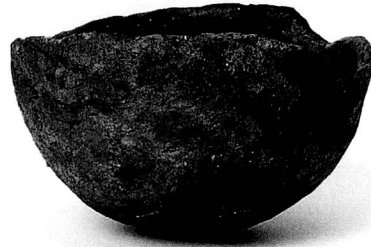
38



40



32



39



41



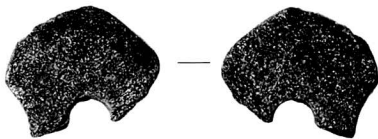
55



56



57



54(実物×3倍)



59



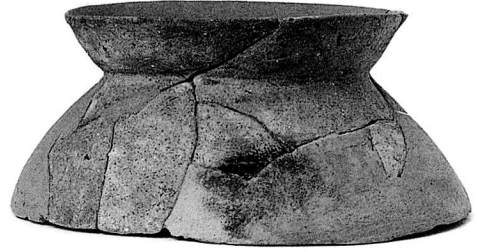
58



61



70



71



74

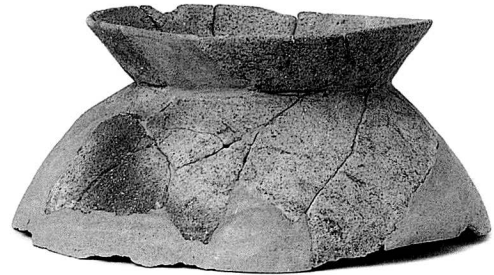
SK303(70・71・74)



81



82



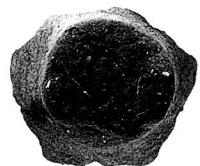
83



89

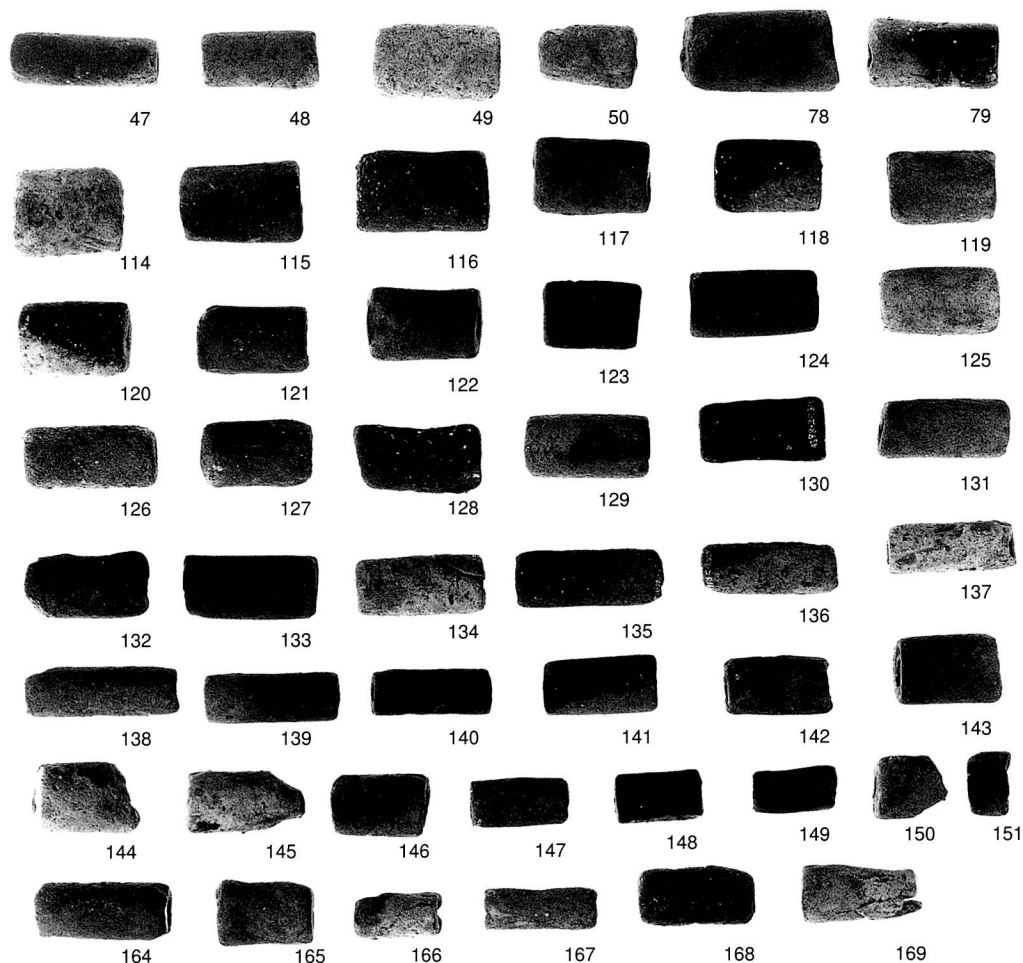


96

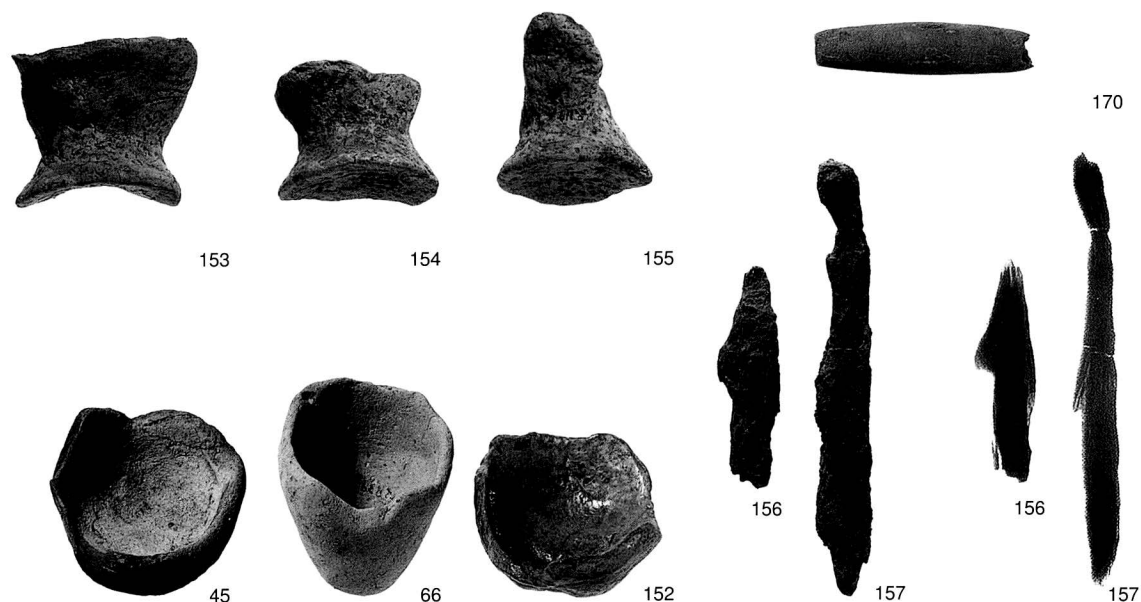


103

SX301(81~83)、第3層(89・96・103)



古墳時代前期の管状土錘



製塩土器(153~155)、飯蛸壺(45・66・152)、中世の管状土錘(170)、鉄製刺突具(156・157)



18



20



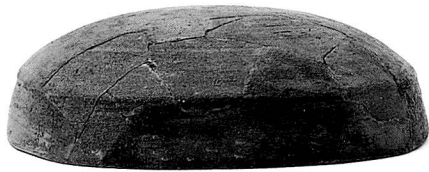
21



19



111



67

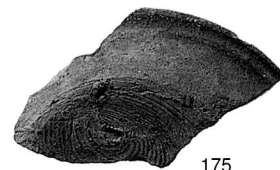


179

171



112



175



178

SB301の1・2層(18~21)、SD305(67)、第3層(111・112)、第2層(171・175・178・179)

大阪市阿倍野区 阿倍野筋遺跡発掘調査報告

ISBN 4-900687-32-4

1999年3月31日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**Archaeological Report
of
Abenosuji Site in Osaka, Japan**

A Report of Excavation
Prior to the Reconstruction of
Minami Funeral Hall

March 1999

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Report
of
Abenosuji Site in Osaka, Japan

A Report of an Excavation
Prior to the Reconstruction of
Minami Funeral Hall

March 1999

Osaka City Cultural Properties Association